

M-GTA 研究会 News Letter No.88

編集・発行：M-GTA 研究会事務局(立教大学社会学部木下研究室)

メーリングリストのアドレス： grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ： http://m-gta.jp/

世 話 人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、倉田貞美、小嶋章吾、坂本智代枝、
佐川佳南枝、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、都丸けい子、根本愛子、
林葉子、宮崎貴久子、山崎浩司（五十音順）

<目次>

◇第 80 回定例研究会報告

【第 1 報告】 3

安齋久美子:母親がわが子の障害を受容していく中でリハビリテーションとの向き
合い方を確立させるプロセス

【第 2 報告】 12

霍沁宇:協働学習における日本語上級学習者の意識変容プロセス
—アカデミック・ジャパニーズの授業を通じて—

【第 3 報告】 29

北村雅昭:経営プロフェッショナルのキャリア形成における転職の研究
～CFOの転職経験に焦点をあてて～

◇各地の M-GTA 研究会活動報告 39

中部 M-GTA 研究会

北海道 M-GTA 研究会

◇第 10 回修士論文発表会のお知らせ 41

◇編集後記 41

◇第80回定例研究会報告

【日 時】2017年5月20日(土)13:00～18:00

【場 所】立教大学14号館5階、D501教室

【出席者】100名

青木 利江子(東京医科歯科大学)・赤井 そのゑ・浅川 雅美(文教大学)・阿部 正子(長野県看護大学)・安齋 久美子(帝京科学大学)・池田江梨(大正大学)・伊藤 尚子(立教大学)・伊東 美佐江(川崎医療福祉大学)・伊藤 美穂(宇部フロンティア大学)・稲妻 伸一(山形家庭裁判所)・井上 みゆき(山梨県立大学)・牛場 かおり(三重大学)・内海 知子(香川県立保健医療大学)・大岡 友子(武蔵野大学)・大角地 久美子(東洋大学)・大橋 重子(横浜国立大学)・小倉 啓子(ヤマザキ学園大学)・長田知恵子(聖路加国際大学)・霍 沁宇(一橋大学)・梶原 はづき(立教大学)・加藤 志保子(帝京大学)・鎌田麻衣子(東京学芸大学)・唐田 順子(国立看護大学校)・河本 乃里(山口県立大学)・上原 明子(都留文科大学)・菊地 真実(早稲田大学)・北村 雅昭(京都美術工芸大学)・木下 康仁(立教大学)・倉田 貞美(浜松医科大学)・古賀裕子(桐生大学)・後藤 喜広(東邦大学)・小林 茂則(聖学院大学)・坂井 真愛(川崎医療福祉大学)・坂田 美枝子(豊橋創造大学)・坂本 智代枝(大正大学)・佐川 佳南枝(熊本保健科学大学)・櫻井 一江(亀田医療大学)・佐鹿 孝子(埼玉医科大学)・佐野 雪子(浜松医科大学)・志田 久美子(帝京科学大学)・篠原 実穂(武蔵野大学)・島影 真奈美(桜美林大学)・鈴木 康美(埼玉県立大学)・鈴木 優菜(国際医療福祉大学)・鈴木祐子(東都医療大学)・鈴木由美(国際医療福祉大学)・清野 弘子(学校法人赤門宏志学院)・高丸 理香(お茶の水女子大学)・竹下 浩(職業能力開発総合大学校)・田近 亜希(首都医校)・谷田 悦男(埼玉県立所沢特別支援学校)・田村 朋子(清泉女子大学)・丹野 ひろみ(桜美林大学)・千葉井 鳴美(女子栄養大学)・辻 久美子(大正大学)・寺田 由紀子(帝京大学)・時田 純子(国立看護大学校)・都丸 けい子(聖徳大学)・長谷昌枝(山口市立病院)・永野 淳子(日本赤十字秋田短期大学)・長山 豊(金沢医科大学)・生天目禎子(帝京大学)・西平 朋子(沖縄県立看護大学)・西巻 悦子(和洋女子大学)・根本 愛子(東京大学)・野澤 祥子(新潟大学)・野中 光代(愛知県立大学)・野原 留美(千里金蘭大学)・橋本 友美(群馬大学)・林 和秀(立教大学)・林 葉子((株)JH産業医科学研究所)・早瀬 賢一(一般財団法人電力中央研究所)・原 理恵(純真学園大学)・平川 美和子(弘前医療福祉大学)・廣川 恵子(川崎医療福祉大学)・福嶋 松代(枚方療育園)・藤原 正仁(専修大学)・古田 加代子(愛知県立大学)・マクドナルド ダレン(大東文化大学)・正木 啓子(国際医療福祉大学)・松井 千鶴子(上越教育大学)・松戸 宏予(佛教大学)・松葉 百合香(早稲田大学)・三浦 美和子・三木 良子(帝京科学大学)・三ツ橋 由美子(国際医療福祉大学)・三宅 美千代(埼玉医科大学)・宮崎 貴久子(京都大学)・村越 望(秀明大学)・森井 展子(山王リハビリ・クリニック)・森山 雄三(九州看護福祉大学)・山川伊津子(ヤマザキ学園大学)・山崎 浩司(信州大学)・山下 尚郎(ルーテル学院大学)・山田 牧子(日本保健医療大学)・山田 美保(名古屋外国語大学)・横山 和世(独協医科大学)・横山 豊治(新潟医療福祉大学)・吉崎 蒔子(上越教育大学)・若林 馨(国際医療福祉大学)

【第1 報告】**安齋久美子(帝京科学大学 医療科学部 理学療法学科)****Kumiko ANZAI : Department of Physical Therapy, Teikyo University of Science**

母親がわが子の障害を受容していく中でリハビリテーションとの向き合い方を確立させるプロセス
Process of acquiring ways to cope with rehabilitation while mothers accept their children's disabilities

〈発表レジュメ〉

発表目的:投稿論文、M-GTA について学びたい

発表者は2016年3月に放送大学大学院修士課程を修了した。修士論文のテーマは「障害をもつ子の親がリハビリテーション専門職に求める支援―障害受容との関連から―」であった。分析方法はインタビューの逐語録をコーディングしてマトリックスを作成し、類似性のあるものをまとめてカテゴリー化していく質的分析方法を採用した。今回、そのデータに3例を追加しM-GTAで分析を行って投稿論文の作成に取り組みたい。

○修士論文と異なる分析方法とした理由は何か

①修士論文作成時に、M-GTA を分析方法として選択すべきかを検討したが、時間的制約のため他の方法を採用した。締め切りまでの時間の制約がなければ、修士論文作成時に学びたかったが、論文のテーマが定まるまでに1年を要してしまい、データ収集の後にM-GTA研究会に参加して学んでからでは間に合わなくなってしまった経緯がある。修了後ではありますが学びたい気持ちに変わりがなかったので今回応募させていただいた。②修士論文では、お手本としていた論文が佐藤郁也氏の「質的データ分析法」参考としていたため、自分もそれに倣い分析を行ったが、手法や結果が本当に妥当なものであったのか、浅い分析や自分の思い込みの部分がなかったか、今一つ自信が持てないでいた。方法論が確立しているM-GTAでスーパーバイズを受けながら確実に分析を進めて、方法を学ぶと同時に修士論文の結果と比較してみたいと考えている。

1. 研究の背景**1-1. 課題**

子どものリハビリテーションに従事する理学療法士、作業療法士(以後「療法士」)などの臨床家にとって、子どもの保護者への支援は重要な位置を占める。中田は、「子どもの発達を支えるには、まず家族を支えることから始めなければならない」^[1]と述べ、家族を支援する専門職の役割について、親が子どもの障害をどのように受容するのかを専門的視点から十分に理解した上で、対峙する必要があると説く。医療関係者から見ると、子の障害を認められない親や障害が治ると信じて疑わない親は、こちらから提供する治療や助言が受け容れられない難渋するケースとして受け取られることもある。障害受容のモデルとして医療職に良く知られる段階説は障害をもつ当事者と

その家族の心理的課題の理解のために一度は学ぶべき理論であるが、多様な論説のなかのひとつのモデルであることを超えて、即時的变化を求めて安易に適用され、当事者に早晚到達点に向わせるような表層的な支援とならないよう慎重に考えることが重要である。障害をもつ子のリハビリテーションを遂行するに当たって、家族と療育の視点を共有し、成長と発達に関する専門的技術が求められることについてはこれまでに先行研究で論じられているが、親が子どもの障害を受容していく変化の過程で、リハビリテーションとのかかわり方をどのように調整しながら進めているのかについての研究は少ない。本研究では、その質的な変容に着目していきたい。

1-2. 先行研究

日本における障害受容は、特に Droter らの段階説と Olshansky らの慢性的悲哀説が広く知られている。特に段階説は我が国のリハビリテーションの第一人者である上田が、障害のインパクトからの立ち直りとその過程は病前の性格、生活史、年齢、社会的家族的環境や疾患によってもかなり異なるものであり受容に至るまでに要する時間も決して同じではないとしながらも、何らかの法則性は認められるのではないかとし、障害受容をショック期、否認期、混乱期、解決への努力期、受容期の 5 段階に整理した。^[2]

これは価値観の転換を障害受容の本質におく考え方であり、上田は「障害の受容とはあきらめでも居直りでもなく、障害に対する価値観(感)の転換であり、障害をもつことが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではないことの認識と体得をつうじて、恥の意識や劣等感を克服し、積極的な生活態度に転ずることである」という定義を提唱した。そこでは障害の受容は「あきらめ」とはまったく異なるもので、障害を心理的に克服する積極的な姿勢であり、「人間全体の立ち直り、生きる力の再獲得」であるとしている。その本質は価値の転換であり、「新しい人間に生まれ変わった」という感覚を伴う。

このような考え方がリハビリテーション領域だけでなく、広く社会全体に受け容れられた背景には、中田が指摘するように「おそらく達観や悟りといった東洋的な物の考え方の影響がある」^[1]と考えられる。障害の受容に関して、人間的な成長の機会や価値観の転換について論じたものが見受けられるが、文化的に仏教の影響をうける歴史的背景を持つ日本において、障害を克服して安定した精神状態に落ち着くことは「悟り」の境地に達するイメージと重なり、肯定的な印象を持って迎えられたと考えられる。

しかし 1980 年代以降、「障害受容」が治療者側にとって都合の良い用い方をされ始めたことに関して、大島らはその弊害を説く。「障害者心理の理解に関することがそこに集約され、リハビリテーション専門職の思惑どおりにうまく遂行できない場合や、治療者側の予測とは異なる訓練結果となった場合などに、治療者の理論による専制性が出やすく」なり、「障害の受容ができないとリハが思ったように進められない」というものである。^[4]

一方で子どもの障害に目を向けると、親が子どもの障害を認識する過程を理解することを目的として中田は螺旋形モデルを提唱した^[5](図 2)。

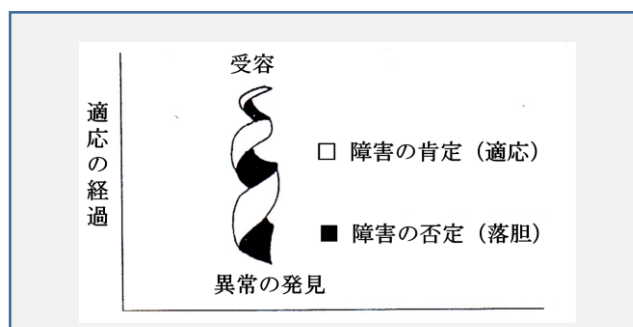


図2 螺旋形モデル[中田, 1995]

これは、親の内面には障害を肯定する気持ちと障害を否定する気持ちの両方の感情が常に存在し、表と裏の関係をなす。表面的にはふたつの感情が交互に表れ、いわば落胆と適応の時期を繰り返すように見えるが、その過程は区切られた段階ではなく連続した課程を示すというものである。段階説が唱えるゴールとしての最終段階があるのではなく、すべてが適応の課程であるとした捉え方である。

また、受容を段階的な受け容れとは異なる視点で考察したものに、重症心身障害児をもつ母親の変化を人間的成長と捉えた牛尾の研究^[6]がある。母親は養育過程において何回も危機的時期を経験し、落ち込みと立ち直りの繰り返しにより新しい態度を形成していくとしている。障害をもつ子どもの養育における危機的時期に関しては、佐鹿によるライフサイクルを通しての支援に関する研究^[7]があり、親の障害受容には4つの要因(わが子の受容、家族の問題の受容、親自身の人生の受容、社会受容)があるとしている。

障害のある子どもをわが子として受け入れるという視点では、北原の受容についての定義^[8]が注目になる。その定義は「親の障害児の受容とは、障害をもった子どもを、自分の子どもとしてあるがままに受け入れ、育児を楽しみながら、障害に応じて適切に育てることを受け入れること」というものである。

親は子どもの障害を受け入れるという容易ではない課題を背負いながら、リハビリテーションに取り組みつつ子どもを養育する。親がリハビリテーションとの距離をどのように取りながら障害についての認識を変えていくのかについて知り、リハビリテーションに特有の課題を明らかにしたうえで、支援の具体的なあり方を検討することの意義は大きいと考える。

○現場では障害をもつ子どもと親に対して理学療法士や作業療法士がどのように関わっているのか

基本的には、子どもの身体機能を評価→プログラム立案と実施→再評価→プログラム最適化→再評価というように評価と治療のサイクルを繰り返します。子どもに対してのプログラムなので遊びをうまく取り入れて進めます。この中で親にも状態の説明や将来的な見通しを伝えて、養育がスムーズに進むよう生活全般を視野に入れて支援します。車いすや装具などの作成も重要で、特に子どもの成長発達に合わせて変化するので使用状況のフォローアップが必要です。

2. M-GTA に適した研究であるか

障害のあるわが子を養育する親の姿を当事者の視点にできるだけ近く、心模様に分け入ってゆく研究として M-GTA が適していると考ええる。また、当事者とセラピストと社会(資源、周囲の人など)との相互作用により対象者が変化してゆく過程は M-GTA により描き出されるものと考ええる。

具体的には、

- ①受容をめぐる変化→プロセス性を有す
- ②療法士との関係が双方に影響を与える→社会的相互作用
- ③概念の生成を目指す

3. 分析テーマの絞り込み

当初は、「障害をもつ子の母親をどのように支援したらよいのか、特にリハビリテーション専門職が母親の姿をどう理解すれば、支援の質を向上できるかを土台として考える。

例えば、リハビリテーションの効果は時期や疾患により程度に差異が生じるが、目に見える効果が明確に実感できない場合であっても、リハビリテーションを継続しているのはなぜなのか。また、心の中では障害の受容がうまくできずに、子どもの障害を受け止める方向へと進んでいっているとは言えないなかで、子どもを育てていかなければならない母親の思いはどのようなものなのか。障害をもつ子どものお母親さん達のこのような経験を理解していくこと、どんな思いで子どもの養育を放棄せずに続けているのか、そのプロセスを明らかにすることを分析テーマに置きたい。従って分析テーマは『母親がわが子の障害についての認識を変容させるプロセス』とする。』としていた。このテーマに副題「ーリハビリテーション専門職との支援との関連からー」を付けて分析を進めていく中で、テーマの中に「母親の障害受容」と「リハビリテーションの支援のあり方」という2本の柱があることが気になってきた(しかも障害受容に重心がある)。そのような折に5/18にSVを受けて、上記のテーマよりもリハビリテーションに焦点をあてて分析テーマを設定してはどうかとアドバイスをいただき、再考した結果、「母親がわが子の障害を受容していく中でリハビリテーションとの向き合い方を確立させるプロセス」とした。

4. インタビューガイド

1. 子どもについて

- 【お子さまのお名前・年齢・性別・生年月日】
- 【お子さまお誕生時のあなた様のご年齢はおいくつでしたか】
- 【お子さまの診断名をお聞かせください】
- 【その診断がついたのはお子さまが何歳のときでしたか】
- 【身体障害手帳をお持ちでしたら、等級をお聞かせください】

2. リハビリテーションについて

- 【リハビリテーションを受けている期間はお子さまが何歳から何歳の時ですか】

例) 3歳～6歳→A病院(PT) 6歳～B施設(PTとOT)

【リハビリテーションの頻度は週に(月に)何回くらいですか】

例) A病院 1回/2週間、B施設 PTは2-3回/月、OTは1回/2週間

【リハビリテーションの内容(目標・プログラム)はどのようなものですか】

3. リハビリテーションの位置付けについて

【あなたにとってお子さまのリハビリテーションは生活全体から見てどのくらいの重要な意味がありますか(効果の有無や癒しや義務感など)】

【今までにしてきたリハビリテーションのどんなところに満足していますか】

【今までにしてきたリハビリテーションのどんなところに不満がありますか】

【これからの(今後の)リハビリテーションにどのようなことを期待しますか】

4. 療法士に求めることについて

【あなたが理学/作業療法士に期待すること(こうしてほしいと思うこと)は何ですか】

5. 社会的援助について

【お子さまが生きていく(暮らしていく)上で、どのような社会のあり方が望ましいと思いますか】

【子育てについて、あなたが若い母親へ伝えたいと思うアドバイスはありますか】

【リハビリテーションについて、あなたが若い母親へ伝えたいと思うアドバイスはありますか】

6. 受容について

【子どもの障害を受容するという見かたからすると、今ご自分の気持はどのような状態にあると感じますか】

5. データの収集方法と範囲

データの収集方法は、発表者が以前担当していた子どもの母親および勉強会仲間である療法士から紹介を受けた方であった。既知の母親とはメールで、紹介された母親へは電話連絡をして協力依頼をし、希望された日時と場所にてインタビューを行った。

データの範囲については、子どもの障害についての受け止め方の変容プロセスを明らかにするため、自身の受け止めをある程度客観的に語ることでできる精神的落ち着きがあることとし、子どもの年齢が6～18歳、理学療法と作業療法のいずれかまたは両方を月に1回以上受けている親のうち、療法士から直接説明を受ける機会の多い母親に属性を統一した。分析対象者となった母親は9名、インタビュー時間は1事例50分から90分であった(表1)。母親の平均年齢は46.2歳、子の平均年齢は12.7歳で診断名は多岐に渡るが、障害像は脳性麻痺を中心とする運動発達障害が主たる症状である。移動能力では半数以上が車いすで制限を伴いながら自力で移動できる身体機能を持ち、他は全介助または装具を使用して歩行するレベルである。就学は男児1名が普通学

級、それ以外の児は全て特別支援学校に通っている。

6. 分析焦点者の設定

理学療法または作業療法を現在受けている、または過去に受けていた子どもの母親

研究協力者の属性一覧(表1)

	インタビュー 日時	子の 性別	子の年齢 ※	母親の 年齢※	診断名1	診断名2	GMFCS
Aさん	2015年3月	男	14	46	脳性麻痺	PDD(広汎性発達 障害)	Ⅳ
Bさん	2015年4月	女	6	39	喉頭軟化症	低酸素脳症	Ⅴ
Cさん	2015年4月	男	15	55	ブラダーウイリー 症候群	てんかん	Ⅱ
Dさん	2015年7月	女	14	44	脳性麻痺	—	Ⅳ
Eさん	2015年7月	男	16	49	4P-(4番染色体単腕部 分欠失症候群)	—	Ⅳ
Fさん	2015年7月	女	13	43	四肢体幹機能障害	—	Ⅳ
Gさん	2015年7月	女	14	51	先天性グリコシル化 異常症	先天性アンチトロ ンビンⅢ欠損症	Ⅴ
Hさん	2015年10月	男	8	38	PVL (脳室周囲白質軟化症)	—	Ⅲ
Iさん	2015年11月	女	14	51	脳性麻痺	—	Ⅳ

※子の年齢、母親の年齢ともにインタビュー時の年齢

7. 分析ワークシート(回収資料)

8. カテゴリー生成

母親の語りの文脈から、子どもの障害受容に関すること及びリハビリテーションに関することを読み取り、17 概念を抽出した。

9. 結果図(回収資料)

10. ストーリーライン(回収資料)

11. 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか、また、いつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。現象特性をどのように考えたか。

・逐語録を作成していくうちに、母親たちの姿がリアルに浮かび上がってきたので、その時点

でストーリーラインのような短い文章を記録していった。

- ・理論的メモはできるだけ経時的に記載したが、整理されていないため後に見直した時に分かりにくくなってしまった。「あれどこに書いたっけ」というときに見つけにくい状態です。
- ・着想やアイデアは、データに向かっている時よりも電車の中などで、概念や定義や繋がりを広くぼんやり考えているときに思いつくことが多かった。
- ・現象特性は、「生きるうえでの障害が自分や家族に生じた状況を受け止める過程」でしょうか。

12. 分析を振り返って、M-GTA に関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点など。

→

- ・納得のいくような概念名をつけるのは難しい作業で、何度も変更し、現在も思案中であるし、まだ変わっていくように思う。
- ・SV とのやり取りのなかで、自分の考え方や長年の悩みが、結果図のなかに忍び込んでいたことに気付いたときには心底驚いた。「研究する人間」とはこういう意味だったのかと思った。理解が間違っていなければいいのですが。
- ・テーマが相変わらず定まらず苦心しているが、時々はっと焦点があったように感じる瞬間は、とても充実感を持つことができる。しかしすぐにもやもやした雲の中に入ってしまう。
- ・M-GTA の奥深さに魅了されました。まだ学びの入り口というところにいるので、継続して取り組みたいです。

〈引用・参考文献〉

- 1) 中田洋二郎:「子どもの障害をどう受容するか―家族支援と援助者の役割」, 大月書店, 2002
- 2) 上田 敏:「リハビリテーションを考える」, 障害者問題双書, 1983
- 3) 上田 敏:「目で見えるリハビリテーション医学」, 東京大学出版会, 1994
- 4) 大嶋伸雄:「保険医療福祉くせものキーワード事典」, 険医療福祉キーワード研究会(編), 医学書院, pp46-47, 2008
- 5) 中田洋二郎:「親の障害の認識と受容に関する考察 ―受容の段階説と慢性的悲哀―」, 早稲田心理学年報 27, pp83-92, 1995
- 6) 牛尾禮子:「重症心身障害児をもつ母親の人間の成長についての研究」, 小児保健研究 57, No.1, pp63-70, 1998
- 7) 佐鹿孝子:「親が障害のあるわが子を受容していく過程での支援(第4報):ライフサイクルを通じた支援の指針」, 小児保健研究 66, No.6, pp779-778, 2007
- 8) 北原 侑:「発達障害児家族の障害受容」, 総合リハビリテーション 23, No. 8, pp657-663, 1995

〈方法論および研究例として参考にした文献〉

- 1) 木下康仁, 2007, 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法』弘文堂
- 2) 木下康仁, 「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチと健康領域での活用」『ヘルスリサーチの方法論 第7章』

放送大学大学院文化科学研究科

- 3)西能代, 岡田加奈子, 2008, 「二分脊椎の母親の子どもの障害認識変容プロセス—小・中学校通常学級での学校生活を通して—」『小児保健研究』Vol.67. No.6
- 4)三輪久美子, 2008, 「小児がんで子どもを亡くした父親の悲嘆プロセス—医療ソーシャルワーカーによる援助への示唆—」『医療社会福祉研究』16:35-43
- 5)木下康仁 編著, 2005, 『M-GTA 分野別実践別グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂

〈会場からの質問・コメント〉

- 「障害受容」の定義は何か。自分は障害を持つお子さんのお母さん達と接していて、障害そのものは受容していないという印象を持っている。また、参考になっている文献が古いので、最新の医療では出生前診断などで受容のあり方も変化しているから、新しい文献も当たってみたら良い。
- テーマを明らかにするために設定するのが分析テーマであるが、ここでは研究テーマと分析テーマが同じになっているが、これで良いのか。
- リハビリテーションの意味合いには広義と狭義とがあるが、テーマと分析テーマでそれぞれ使われている「リハビリテーション」は同じものか。母親達が PT と接している時にリハビリテーションの意味するものは「機能訓練」であるだろうし、テーマでは人間的な成長も含めた広義のリハビリテーションについて考えていくべきと思う。
- 子どもの場合には「ハビリテーション」であり、この点も考察すると良いのでは。
- 分析テーマはできるだけ専門用語を使わずに設定すると良い。
- 分析シート、分析焦点者、分析テーマを見ると、概念名において母親が主語になっていないように思う。母親がどうなのか、ということをもっと考えていくと良い。
- 概念名「リハビリテーションの負担」と「姿勢の揺らぎ」は「リハビリテーション優先の生活に対する疑問」というひとつの概念にまとめられるのでは。
- 分析テーマから考えると、テーマに合致していない概念が見受けられる。
- 分析テーマから生成された結果図を見ると、上半分の部分は不要なのではないか。
- 現象特性と結果図から見ていくと、曖昧な部分が気になる。
- 結果図が、修士論文の結論の影響もあるのか時系列になってしまっている。振り子のように揺れる気持ちの部分に着目して分析を進めていけば良いと思われるが、分析テーマが整理できていないので今後の課題。
- 分析テーマに照らして概念生成していくわけで、作る概念というのは必ず何らかの意味で自分が設定した分析テーマのある部分を説明できているかどうか、いつもチェックを入れていく必要がある。この点では結果がやはりぴんと来ない。それは、データを見ていったときに、発表者が分析テーマを意識していなかった、あるいは意識がデータの内容に目移りしてしまっていて、一貫してフォローし切れていなかったことが原因かと思う。分析焦点者と分析テーマの設定というのは、本当に中心的な部分であり、今回の場合だと母親の障害受容のプロセスが一つあって、その中でリハビリテーションとの向き合い方を確立させるプロセスという大きな課題設定となっている。この

プロセスを説明するのは、大変複雑なことになってしまう。この研究で確実なのは、障害のある子どもをもった母親たち、という部分と、もう一つは、リハを受けている、ということであって、発表者の研究からしたら、リハを受けていることの意味を入れたいのだと思う。そう仮に考えるとこのテーマは、例えば「リハビリテーションとの向かい合い方（「かかわり方」でも良い）が母親のわが子の受容を確立していくプロセス」などが考えられ、あくまでリハビリテーションとの関わり合いが、「わが子の受容」を確立するという方が広く意味が取れると思う。リハビリテーションとの向かい合い方が、母親のわが子の受容を確立させていくプロセス、とすれば、母親がわが子を受容する形はほかにもいろいろあるのかもしれないが、この研究はあくまでリハとの関係でもってこの問題を考えていく、明らかにしていくというふうに課題を設定したら、このプロセス一点のところに再編成されていくのではないかと思われる。発表者の PT であるという部分が、分析の中である意味で邪魔をしていると言えるかもしれない。そこで距離を取っていいけるのが、分析テーマと分析焦点者のこの設定の部分なので、そのような意味では道半ばという印象を受けた。

〈発表した感想〉

不十分な状態ながら発表させていただく機会を頂戴しましたこと、心より感謝申し上げます。何が分かっていなかったのかが明確になり、肝心のところができていなかった事が良く分かりました。SV の坂本先生をはじめ、会場や回収資料でいただいたコメントは貴重なもので、本当に私の理解を助けてくれました。分析の核をなす分析テーマと分析焦点者の設定をしておいて、再度分析に取り組む所存です。研究会では、聞く側でも十分に学ぶことができますと思いますが、発表することで何倍ものお土産を持ち替えることができると実感いたしました。有難うございました。

【SV コメント】

坂本智代枝(大正大学)

たいへん貴重なデータで意義深い研究だと考えます。SV をさせていただき、たいへん学びの多い機会をいただきありがとうございました。以下の通り、SV のプロセスをまとめておきたいと思います。

① 「分析テーマの絞り込み」について

研究発表会の前の SV のやり取りの中で、当初分析テーマは「母親がわが子の障害についての認識を変容させるプロセス」とありました。しかし、インタビューガイドではリハビリテーションに関する内容が多いように思いました。データはリハビリに関することが多いのではと推測したことから、もう少し分析テーマを絞っても良いのではないかとお伝えしました。インタビューガイドや安齋さんのリサーチクエスチョンを確認するなかで、「たいへんにリハビリの中でどうしてお母さんたちはいつも明るく

元気なのか」、「何がリハビリに向かわせているのか」といったことがあったように思います。研究する者が何を明らかにしたいのかについて検討することが重要だと考えます。

さらに、データの中で親のどんな語りに着目したのか、どんな語りがあるのかによって、分析テーマを設定し直す必要があると思いました。

② 分析結果について

研究発表会の前のSVにおいて、8. 分析ワークシート概念「リハビリテーションの負担」について、どのような負担があるのか、どのような疲弊があるのか、どのようなプロセスで負担に至るのかに着目するとよいのではとお伝えしました。

会場のフロアからの質問などにもあったように、「分析テーマ」を絞り込むことにより、安齋さんが明らかにしたいプロセスに焦点化した概念生成ができるのではないかと思います。

しかし、何度か分析を試みる過程で自身が明らかにしたいプロセスは何かをつかむことができるようになるのではないかと思います。その一つの段階のプロセスなのかと思います。また、スーパービジョンを受ける中で気が付くことも多いのではないかと思います。

③ 結果図とストーリーラインについて

研究発表会の前のSVにおいて、結果図が時系列のプロセスになっていることをお伝えし、分析結果の図の中のどのあたりが「リハビリテーション専門職との関連」ならではのプロセスになっているか考えると良いのではないかとお伝えしました。たとえば【負担による心身の疲労感】と【身体機能正常化への期待感】が双方向の⇒になっていますが、これは誰とのどんな相互作用によってこのような現象や概念生成になったのか、再度検討されると良いと考えました。

最後に短いSVの時間の中で、「分析テーマの絞り込み」を明確にすることに焦点を置いたSVをすべきであったと反省いたしました。安齋さんが「どのような現象を明らかにしたいのか」ということについて、深く掘り下げていくことができればより明確な結果図が見いだせるのではないかと思います。

【第2 報告】

霍 沁宇(カク シンウ)(一橋大学言語社会研究科博士課程)

Huo Qinyu: Hitotsubashi University Graduate School of Language and Society

協働学習における日本語上級学習者の意識変容プロセス—アカデミック・ジャパニーズの授業を通じて—

The Transition Process of Advanced Japanese Learners' Consciousness in Collaborative Learning- Through Academic Japanese Classes -

〈発表レジュメ〉

(1) 研究の背景

日本の大学・大学院で学んでいる日本語上級学習者は、日本語で書かれた専門分野の教科書や文献を読み、研究計画書や、自らの調査に基づくレポートや論文を書くことが多い。また、大学・大学院のゼミなどの場面で、他者の研究に関して意見を述べたり、自分が書いた論文について他者と質疑応答したりすることも求められている。こうした読むこと、書くことをめぐる一連のアカデミック活動によりよく参加するために、上級学習者にはアカデミック・ジャパニーズの教育が必要であると考え。門倉(2006)は①自国での教育で習得した知識を前提として、日本の大学で学習・研究活動を行うための日本語能力、②日本での留学生活を送る上で必要な日本語によるコミュニケーション能力という二つの面からアカデミック・ジャパニーズを規定している。山本(2004)は、アカデミック・ジャパニーズを「大学・大学院等での学術分野のみならず、卒業後の職業生活や社会生活で営まれる知的活動を通して使用される高度な日本語」と定義している。アカデミック・ジャパニーズの教育に関して、堀井(2006)は日本語を使っていかに問題を発見するか、いかにその問題を考えていくか、いかに批判的に捉えていくか、そして、いかに自分の考えたことを伝えていくかという問題発見解決能力を育成する教育が大切であると述べ、学部留学生に対する初年次日本語教育の実践を紹介している。山本(2004)は学部二年生に対する論理的・分析的・批判的思考法を養成するためのアカデミック・ジャパニーズの教育を試みている。

本研究は協働学習を重視したアカデミック・ジャパニーズの授業を対象とする。協働の定義に関しては、佐藤(1999)は、能力面の特性だけでなく、違った視点・別の考え方の相互交流による学びであると述べている。仲間同士の協働は互いの理解を進め、必要な支援を提供しあう関係を作るという(Ohta, 2001)。舘岡(2007)は、協働学習が提供する学びの場において、「学習者自身」、「仲間の学習者」と「学ぶ対象」との関係を図1のように示している。ここでは、学習者と対象と他者を結んだ三角形は、「他者との対話によって学ぶ対象への理解が促進されたり深まったり広がったりする世界」を意味している。学習者と対象と自己を結んだ左の三角形は、「対象への学びの過程で自問自答を繰り返し、対象を学ぶと

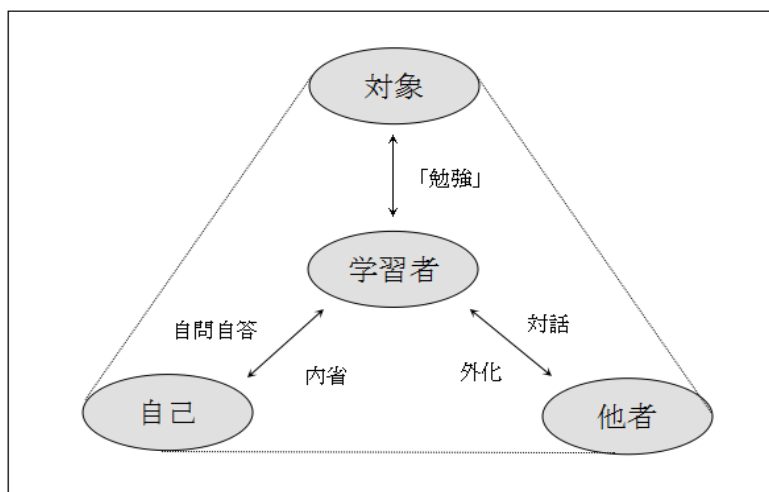


図1 協働的な学習が提供する学びの場(舘岡、2007)

同時に自己の考え方や見方を吟味すること」を意味し、「自己とたえず対話をしながら学ぶことは、より自律的な学びとなる」。そして、下の三角形は、「学習者と自己と他者を結ぶもので、他者との対話を通して、自己自身を見つめ直し学んでいく」というものである。協働的な学習の場では、学習者を中心としてこの三つの三角形が形成されているという(舘岡、2007)。

協働学習を用いた授業活動において、学習者同士、学習者と教師との社会的相互作用が生じ、授業を通して、学習者の意識が変容する可能性がある。協働学習を用いた授業活動における学習者の意識変容プロセスに関する研究には、原田(2015)と霍(2015)が挙げられる。原田(2015)は、協働作文活動としてのピア・レスポンスに対する認識の変容過程を木下(2003)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を用いて明らかにしている。霍(2015)は、文章を通じての、学習者の自己との対話、学習者同士の対話、教師を交えた全体の対話という「三つの対話」を用いた学術的文章の読解授業を対象に、受講生の読み方の意識変容プロセスをM-GTAを用いて分析した。

本研究は都内の大学で行われた協働学習を重視したアカデミック・ジャパニーズの授業を対象に、授業に参加した18名の日本語上級学習者の意識変容プロセスをM-GTAを用いた分析で明らかにしていきたい。分析の結果は、日本語学校や大学などの教育機関において、アカデミック・ジャパニーズの力を育成するための授業や、協働学習を重視する上級日本語教育に参考になると思われる。

(2) M-GTA が適した研究であるかどうか

本研究は、調査に基づき、アカデミックな文章を書かせる協働学習の授業を通じて、日本語上級学習者の思考方法がどう変わったか、その変容プロセスを明らかにすることを目的とする。M-GTAは社会的相互作用に関わり、限定された範囲内における人間行動の説明と予測を可能にする理論をデータに密着しながら帰納的に生成するアプローチである(木下、2003、2007)。本研究の調査対象者は多様な背景を持つ学習者であり、授業における学習者同士、学習者と教師との社会的相互作用を通じて彼らの意識が変容する可能性があり、その変容はプロセス的特性を有すると考えられる。そこで、データの分析方法としてM-GTAが適していると判断した。

(3) 研究テーマ

協働学習における日本語上級学習者の意識変容プロセス—アカデミック・ジャパニーズの授業を通じて—

(4) 分析テーマの設定

最初はアカデミック・ジャパニーズの授業における協働学習を通じて、日本の大学・大学院でのアカデミック活動に参加する際の思考方法(論理的、批判的な考え方など)がどのように変わっていくかを明らかにすることを目的とした。分析を進めていくうちに、また、研究会でご指摘をいた

き、思考方法に焦点を当てるより、学習者が協働学習を通じて、どのような悩みや葛藤を感じ、また、意識がどのように変容していくのかに注目したいと考えた。分析は未だ途中(現在は 5 人目の対象者を分析している)であるため、暫定的な分析テーマとさせていただきたい。

(5) インタビューガイド

インタビューは授業開始時、中盤時、終了後に 3 回に分けて実施した。毎回 1 人の学習者に対して 1 時間程度実施し、一人当たり合計 3 時間程度インタビューした。インタビューの概要を表 1 にまとめる。

表 1 インタビューの概要

回	実施時期	質問項目
1	授業開始時(2 回目か、3 回目の授業後)	① 日本の大学や大学院で研究を進めていくことに対して、どのようなイメージを持っていますか。また、研究するにあたって、どのようなことが必要だと思いますか。 ② 論文・レポートを日本語で書いたことがありますか。また、どのように書きますか。論文・レポートを日本語で書くときに困っているや、不安に感じたことがありますか。 ③ ゼミで発表したことがありますか。発表のときに困ったことはありましたか。また、準備はどのようにしますか。発表の準備で困っていることがありますか。 ④ ゼミで質問・コメントをしたことがありますか。また、それはどのような質問・コメントですか。ゼミの質問・コメントで困っていることはありますか。 ⑤ アカデミックな内容を学ぶ専門日本語の授業を受講したことがありますか。また、それはどのような授業でしたか。 ⑥ この授業は日本語での論文・レポートの書き方、ゼミでの発表・質問・コメントの仕方を学ぶ授業です。この授業にどのようなことを期待しますか。
2	授業中盤時(8 回目か、9 回目の授業後)	① ここまで論文・レポートを書くための研究の進め方を授業で勉強してきましたが、この授業にどんな印象や感想を持ちましたか。日本の大学や大学院で研究を進めていくことに対して、イメージや必要だと思うことが変わりましたか。また、それはどんなことですか。 ② ここまで授業を受けて、論文・レポートを日本語で書くときに参考になることはありましたか。また、それはどんなことですか。授業を受けるまえ、あなたが論文・レポートを日本語で書くときに不安に感じたことはどんなことでしたか。また、それは、この授業の受講によって解決されましたか。 ③ ここまでゼミを対象にした発表・質問・コメントの分析方法を学んで来ましたが、その分析方法についてどんな印象や感想を持ちましたか。 ④ ここまで授業を受けて、ゼミでの発表・質問・コメントで参考になることはありましたか。また、それはどんなことですか。 ⑤ ここまで授業を受けて、この授業はあなたの期待に応えるものだと感じていますか。グループや教師とのディスカッションを中心に、満足している点、不満や疑問に感じている点について教えてください。
3	授業終了後(コース終了直後)	① 最後まで授業を受けて、日本の大学や大学院で研究を進めていくことに対して、イメージや必要だと思うことが変わりましたか。また、それはどんなことですか。 ② この授業をととして、論文・レポートを書くための研究の進め方を授業で勉強してきましたが、この授業にどんな印象や感想を持ちましたか。 ③ 授業を受けるまえ、あなたが論文・レポートを日本語で書くときに困っていたことや、不安に感じたことはどんなことでしたか。また、それは、この授業の受講によって解決されましたか。 ④ この授業をととして、ゼミを対象にした発表・質問・コメントの分析方法を学んで来ましたが、日本語でのゼミを分析してみてどんな印象や感想を持ちましたか。 ⑤ 授業を受けるまえ、あなたがゼミでの発表・質問・コメントで困っていたことはどんなことでしたか。また、それは、この授業の受講によって解決されましたか。 ⑥ 最後まで授業を受けて、この授業はあなたの期待に応えるものだと感じていますか。とくに、グループや教師とのディスカッションという方法についてどう感じましたか。満足している点、不満や

		疑問に感じている点について教えてください。 ⑦ 最後まで授業を受けて、日本の大学で勉強や研究を進めていくうえで、あなたの姿勢や方法が変わりそうですか。また、それはどんなことですか。
--	--	---

(6) データの収集法とデータ範囲の方法論的限定

調査対象となる授業は 2015 年度後期に都内の大学で行われた協働学習を重視したアカデミック・ジャパニーズの授業である。授業は、日本の大学院で行われた、日本人、留学生同士のゼミナールの録画、録音データを社会言語学の観点¹から分析することにより、最終的に一人一本のレポートを完成していくことを内容とする。

表 2 15 回の授業項目と授業活動

回	日付	授業項目	授業活動
1	9 月 29 日	ガイダンス	教師による講義: 授業の目的と内容の説明
2	10 月 6 日	担当分野の決定	教師による講義: 授業の詳細と分析観点についてビデオを見せながら説明
3	10 月 13 日	先行研究を読む	ピア・リーディング: 談話分析に関する文献を 3~4 名のグループで読み、議論
4	10 月 20 日	先行研究を読む	ピア・リーディング: 自分の分析観点の文献を読み、2 名のペアで 3 回説明
5	10 月 27 日	研究テーマを決める	ディスカッション: ①最初の 30 分で研究の組み立てを自身で検討、②次の 30 分×2 で研究内容を 1(学習者) + 1(支援者) に説明
6	11 月 10 日	先行研究をまとめる	ピア・レスポンス: ①先行研究をまとめる(宿題)、②3~4 名でピア・レスポンスを実施。その後、全体討論
7	11 月 17 日	調査課題と方法をまとめる	ピア・レスポンス: ①調査課題と方法をまとめる(宿題)、②3~4 名でピア・レスポンスを実施。その後、全体討論
8	11 月 24 日	データベースを作る	自分で作業: PC 持参で教員と相談しながらデータベースを作成
9	12 月 1 日	分析結果を集計する	自分で作業: PC 持参で教員と相談しながらデータを集計
10	12 月 8 日	分析を表現する	ピア・レスポンス: ①データの集計結果をまとめる(宿題)、②3~4 名でピア・レスポンスを実施。その後、全体討論
11	12 月 15 日	考察を表現する	ピア・レスポンス: ①集計結果に考察を加える(宿題)、②3~4 名でピア・レスポンスを実施。その後、全体討論
12	12 月 22 日	論文にまとめる	ピア・レスポンス: ①まとめをのぞく論文を完成させる(宿題)、②ペアでピア・レスポンスを実施。その後、全体討論
13	1 月 12 日	要約を表現する	ピア・レスポンス: ①要約(まとめ)、キーワード、タイトルをつける(宿題)、②ペアでピア・レスポンスを実施。その後、全体討論
14	1 月 19 日	成果発表の準備をする	ディスカッション: 開始部、展開部、終了部でグループ発表の準備をする
15	1 月 26 日	成果を発表する	プレゼンテーション: 開始部、展開部、終了部でグループ発表を行う

(7) 分析対象者の特性

授業に参加した 18 名の日本語上級学習者は多国籍であり、日本語レベルは日本語能力試験 N1 以上である。学習者の出身、所属及び授業で選んだ、ゼミを分析する社会言語学の研究テーマは次頁表 3 の通りである。

¹ ゼミを分析するために、次の社会言語学の観点を与えられ、学習者に選んでもらった。①あいづち、②配慮表現、③応答表現、④視線配布、⑤多重的節連鎖構造、⑥接続表現、⑦参照、言及表現、⑧言い指し、⑨スピーチレベルシフト

表 3 学習者のプロフィールと研究テーマ

	出身地	所属	身分	研究テーマ
A	オーストラリア	社会学部	交流学生	大学院ゼミの談話における前置き・配慮表現について
B	中国	法学部	交流学生	ゼミの発話におけるあいづちが出る前の表現について ーいいさし表現を中心にー
C	中国	経済学部	交流学生	大学院のゼミで行われたスピーチレベルシフトについての研究
D	中国	国語研究所	研究員	大学院のゼミの談話における接続表現
E	中国	社会学部	学部生	大学院ゼミの談話における視線配布
F	中国	社会学部	学部生	ゼミにおける多重的節連鎖構造表現と応用
G	韓国	社会学部	学部生	配慮表現における断定緩和機能について
H	オーストラリア	社会学研究科	研究生	※日本語のフィラーという観点を選んだが、授業を途中でやめ、最終レポートの完成に至らなかった
I	中国	社会学研究科	研究生	ゼミの談話の参照・言及表現における引用形式の機能 ー「と」と「って」を使う表現を中心にー
J	台湾	社会学部	交流学生	大学院のゼミナールにおける領き行動
K	中国	商学部	学部生	話し言葉の多重連鎖構造
L	台湾	商学部	学部生	大学院のゼミの談話におけるスピーチレベルのシフト
M	台湾	社会学部	学部生	あいづち的発話によるターンの受け継ぎの変化
N	台湾	社会学研究科	研究生	大学院のゼミにおける言いさし文の機能について外国人と日本語母語話者の相違ー「ケド」、「ガ」を中心にー
O	韓国	商学部	学部生	ゼミの談話における接続表現の使用傾向とその分析
P	セルビア	法学研究科	修士	日本の大学の「ゼミ」における談話の分析ー話者が反論するための条件ー
Q	中国	社会学部	交流学生	ゼミにおける発表者の応答表現について研究ー日本国内の大学の「ゼミ」における談話分析ー
R	アルゼンチン	社会学部	学部生	※テーマがまだ決まっていない段階で授業をやめた

(8) 分析焦点者の設定

日本の大学でアカデミック・ジャパニーズの授業を受講した日本語上級学習者

(9) 分析ワークシート:

分析ワークシート 18(次頁表 4):円滑な交流のために

表4 分析ワークシート 18

概念: 円滑な交流のために
定義: 他者との協働学習を通じて、日本語でより円滑なコミュニケーションを行うために、どのような工夫が必要かを考えること。
<p>バリエーション:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(O/151202)ただ、私も、最初は、あのう、日本の文化に、あのう、慣れていない時期は、あのう、ただ、「ああ、それは、ちょっと、違うんじゃない」っていう、すごく言っちゃってた、言ったりしてたんですけど、それだと、ちょっと、向こうの気を損なうというか、あのう、全然、そういう、喧嘩(笑)、口喧嘩する所じゃないのに、向こうが、ちょっと、気、気分が悪くなると、それも気分が悪くなっていく、あのう、機嫌を損なうのも、あれは、あんまり良くないなと思って、あのう、こう、<u>和をあんまり、くずさな、くずさな、崩さない為にも、まあ・・・。</u>だから、まず、向こうのことを、こう、認めるというか、「それも良いけど、こういう所が足りないんじゃない」みたいな。 ・(O/151202)だから、そういう所で、自分の意見が、正しいですよとか、あのう、向こうの意見も良いけれど、<u>こういう所が足りないんじゃないですか</u>っていう、あのう、言う為には、そのう、さっきも言いました、何回も言いますが、<u>論理的な思考</u>っていうか、説得力のある、そういう話し方って、凄く大事ですね。 ・(O/151202)そういう、ワンクッション置いて、あのう、自分のことを、自分が言いたいことを言うと、お互い、あんまり、そういう、あのう、喧嘩せずに、<u>上手く議論が出来るんですよね。</u> ・(H/151210)だから、別に、年上、年下、一番良くないのは、逆に、ほら、なんか、年上だから、偉そうに、なんか、敬語を使わずに、するのは、<u>そういう人にはなりたくないから。</u>でも、僕は、悪気なく、あのう、なんていうのかな、くだけた喋り方してるつもりだから。<u>偉そうに、偉そうな態度でやったら、多分、良くないと思うから。</u> ・(H/151210)人に説明出来るように、出来るように、まあ、ある程度、<u>読んだ内容を、自分の中でまとめておく</u>っていうのは、凄く、大事なかなとは思いました。 ・(E/160203)自分が質問する時、なんか、相手、<u>相手を緊張させないように、</u>ちょっと、質問方を変えたり、してる、していますね。今振り返ってみると。そういうことをしていました。例えば、あ、ひとつの、まず、なんか、質問して、相手はちょっと困った顔をしていて、あ、だめだ、緊張、緊張させるような質問方法はだめだ、ちょっと言葉を変えて、もう一回質問します。はい。 ・(K/151202)なんかこう、言い方は悪いですけども、やっぱ、<u>語学力の違い</u>ってあるじゃないですか。それこそ、上達(?)の人もいるし、まあ、<u>あんまり喋らない人も</u>いるということで、う～ん、何でしょう、こう、あんまり日本語を喋れない人、まあ、そこまで喋れなくはないんだけど、<u>に対して、どういう風にコミュニケーション取るのは、実は、ちょっと、微妙に違って、まあ、そこは、く、苦労した</u>というか、心掛けた、そのう、<u>もっと易しい日本語で喋るみたい</u>な。スピードを落とすみたいとか。 ・(E/160203)うまくいかなかったことは、そうですね。たぶん、自分の質問がバカな質問だった時、まあ、((笑)バカな質問はどんな?)自分は、「これはどういう意味ですか」はい、実際、書いてありますけど、自分が見逃して、まあ、見逃して、書いていないと思った。そういう質問は結構失礼ですよ。(笑)まあ、自分が書いているのに、ほら、ちゃんと読んでないでしょう。でも、そういう時は結構、情けないなあ、自分。はい。それが一番気まずい時ですね。まあ、それは、もちろん、そういうことはあまりなかったと思うんですけど、相手が質問してくれない時は、結構不安ですね。やっぱ自分が書いたものが面白くないから、相手は何も質問してくれないかな。はい、そうです。(もうしかして、相手がまだちゃんと理解していない、まだ考えているとか)うん、そうですね、はい(笑)むしろわからないところがあったら、<u>どんどん質問したほうが良い</u>と思いますけどね、でも、たまに、まあ、相手に失礼なあと思われたら、アウトですけど... ・(E/160203)うん、まあ、<u>自分としては、相手は失礼な質問をしても大丈夫</u>ですけど、自分は相手に失礼な質問をするのは嫌ですね。(笑) ・(H/151012)(じゃあ、そのう、コメント、質問をする時に、困ったり、不安に感じたりしたことはありますか?)まあ、こ、<u>こういうことを聞いたら、どう思われるかとか、心配したりはするかな。</u>あのう、あんまり批判し過ぎたら、なんか、相手も傷つくかもしれないじゃないですか。だから、そのう、言い方、そうですね、まあ、あのう、あんまり敬語は得意じゃないとか言ったじゃないですか、最初の方に、<u>まあ、丁寧に(笑)、出来るだけ、ねえ、質問はしようとはしてますけど。実際、ちゃんと出来ているのかは、わからなかったりしますけどね(笑)。</u>はい。 ・(H/151210)あのう、やっぱり、ノート、ノート、重要だなと思いました。<u>内容がわからないと、説明出来ないし、説明出来ない</u>と、向こうも、なんか、<u>ねえ(笑)、困っちゃうし</u> ・(H/151210)なんか、そういう言い回しとかを、なんか、ね、あのう、批判を和らげ、和らげる為に、なんか、付け加えておくとか、なんか、そういう、ね、相手のことを思って、お、同じ、同じね、学生の身分で、まあ、みんな、一生懸命頑張ってる、苦しみながら(笑)、なんか、頑張ってる中で、あんまり、あまりにも辛い、ねえ、あのう、突っ込んだ批判とかしちゃうと、ねえ、申し訳ないし。自分がそんなことされたら、嫌だみたいな(笑)。他の人のね、相手のことを思って、まあ、あるいは、グループ全体の雰囲気、まあ、ねえ、出来るだけ、気持ちよく議論出来るように、ねえ、やっぱり、持っていけたら良いですよね。

理論的メモ:

- ・より円滑で、より効率のよく、他者と平等に対話することがアカデミック活動において重要だと考えられる。
- ・授業における協働学習を通じて、また、ゼミ談話を分析することによって、よいコミュニケーションのための話し方に関して考えるようになり、今後のアカデミック活動にも応用しようとする意識が見られた。
- ・よりよいコミュニケーションを目指すための探索は、学習者がアカデミック活動によりよく参加することにプラスに影響し、思考方法の変容にもつながるのではないかと考える。

・対極例:

(K/151014) 自分は外国人であることを承知しながら、こう、外国人だからこその特権だと思うんだけど(笑)、要は、なんか、シーンとするじゃないですか、大体、なんか、「質問ありますか？」って言ったら、大体、シーンとするのが、日本の普通の現状だと思うんですけど、そこで、こう、僕は、それを、知ってるんですが、要するに、日本人って、そういう空気だろうなっていう風に知ってて、かつ、日本人もそれを自覚しているから、むしろ、外国人がその沈黙を破ることが出来る特権みたいなのが、自分なりに、結構、使っていて(笑)。ああ、そうですね、僕は結構、質問する方ですね。しかも、結構、直接に、こう、違うものは違うって言う。それも、結局、何だろう、前提があって、要は、自分は、日本人の学生だという風に、周りに認識されちゃったら、そんなやり方は、多分通じないと思う。だから、あのう、自分の外国人のアイデンティティをマックスに使わせるみたいなの。

(↑効果はともかく、敢えて外国人という身分を利用し、沈黙を破ることも、よりよいコミュニケーションのための探索ではないかと考える)

(K/151014) うんとね、コメントでいうと、結構、僕、一番ストレートな場合は、「すいません、意味わからないです」という(笑)。

(K/151014) もう、その、その批判。もう、そのまま批判。もう、「あなたがやってるものって、意味あるの？」っていう(笑)。それぐらいの批判はある、出てくるし、質問であれば、そうだね、なんか、日本人、そう、日本人がコメントすると、大体、そう、なんか、先生の授業でも言ってたように、「僕の理解不足かな」って、そこから始まるんだよ。

・相手とよりよいコミュニケーションを図るために、より円滑なコミュニケーションのために努力する場合と、自分が外国人である身分を利用したりするなど、率直に質問したりする場合があることを考えると、二つの概念に分けた方がよいと考え、概念を修正した。(カテゴリー:よりよいコミュニケーションの探索=概念:円滑な交流のために+概念:敢えて「生意気」に参加する)

(10) カテゴリー生成:

例として、暫定的なカテゴリー【よりよいコミュニケーション】の生成について紹介する。学習者のインタビューデータを調査し、授業における協働学習を通じて、また、ゼミ談話を分析することによって、ゼミなどの場面でのコミュニケーションの仕方について考えるようになり、今後のアカデミック・活動にも応用しようとする意識が見られた。よりよいコミュニケーションを目指すための探索は、学習者がアカデミック活動によりよく参加することにプラスに影響し、意識の変容にもつながるのではないかと考え、まず概念として〈よりよいコミュニケーションの探索〉を生成した。その後、他者とより円滑なコミュニケーションのための努力と他者との交流で、敢えて率直な意見を出すという具体例が見られたため、概念として〈円滑な交流のために〉と〈敢えて「生意気」に参加〉をそれぞれ生成し、カテゴリー【よりよいコミュニケーション】にまとめた。また、研究活動を行う際に、他者の意見と自身の研究のオリジナリティのバランスをどのように考えて研究を進めていくかに関わる概念(他者の意見と自身のオリジナリティとのバランス)、同じく外国語である日本語を使用し、コミュニケーションをする留学生同士の交流は日本語への不安を軽減できるという〈安心感につながる留学生同士の交流〉、仲間だけではなく、先生の意見やフィードバックをもっと聞きたいという〈先生の知恵も借りたい〉も生成され、この三つの概念も、【よりよいコミュニケーション】に関わると考え、下位概念としてまとめた。

(11) 結果図:

以下では現段階5人の対象者のデータ分析で暫定的に作成している結果図(図2)を示す。【 】はカテゴリー、〈 〉は概念を示す。

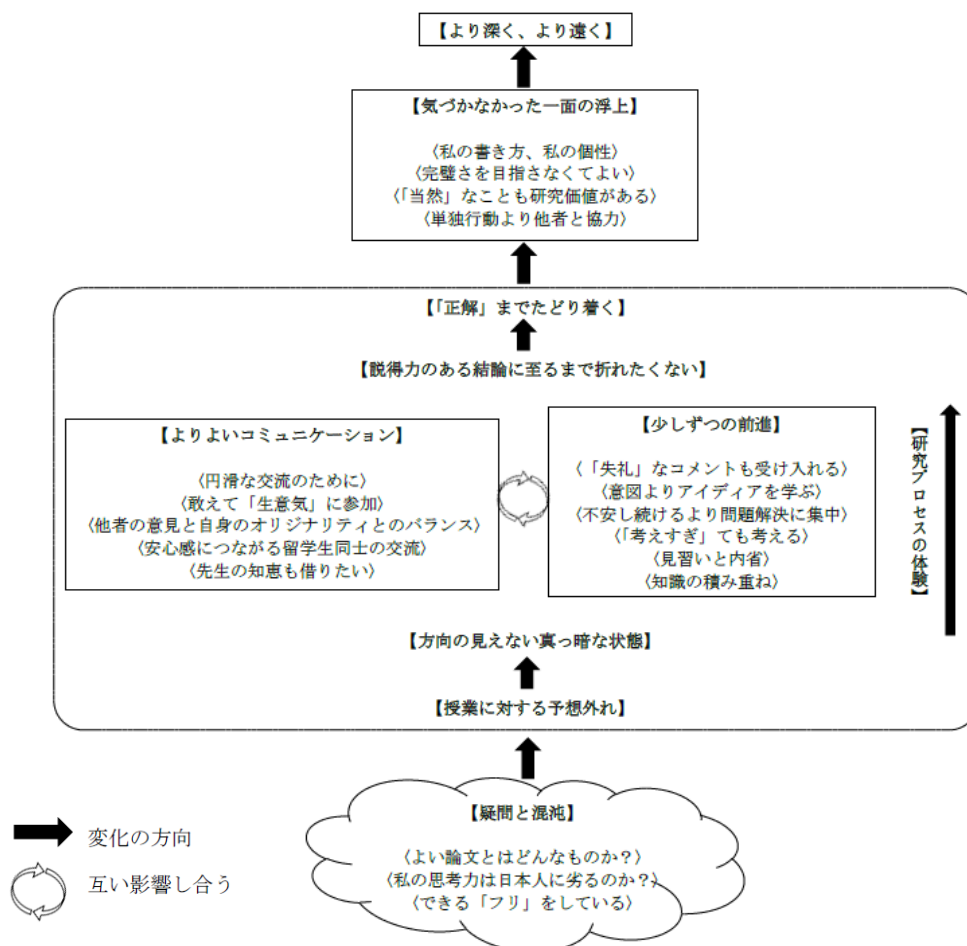


図2 協働学習における日本語上級学習者の意識変容プロセス(暫定)

(12) ストーリーライン

日本語上級学習者は、授業の前に【疑問と混沌】という状態にある。具体的には、〈よい論文とはどんなものか?〉〈私の思考力は日本人に劣るのか?〉という疑問を抱き、また、日本語能力などの問題で、コミュニケーションにおいて他者の発言を理解できなかったりする時もあるが、他者を配慮し、〈できる「フリ」をしている〉場合もある。

授業活動が始まり、最初は、授業内容が自身の予想や期待とは異なることに気づき、〈授業に対する予想外れ〉がある。その後、【方向の見えない真っ暗な状態】に入り、そこから抜け出すよう、ま

ず、【よりよいコミュニケーション】のために努力している。具体的には、〈円滑な交流のために〉工夫したり、コミュニケーションの効率性を求め、〈敢えて「生意気」に参加〉することもある。また、協働学習を通じて多くの意見をもらい、〈他者の意見と自身のオリジナリティとのバランス〉を考えながら、研究活動を進めていく。そして、〈安心感につながる留学生同士の交流〉ができ、さらに〈先生の知恵も借りたい〉と思っている。一方、他者とコミュニケーションしながら、【少しずつの前進】のために頑張っている。まず、自身の研究に参考になるため、〈「失礼」なコメントも受け入れる〉。次に、相手のコメントの〈意図よりアイデアを学ぶ〉ことに努めている。また、〈不安し続けるより問題解決に集中〉し、頭をフル活用し、〈「考えすぎ」でも考える〉ようにしている。同時に、他者の学ぶ様子や成果物を見ながら、〈見習いと内省〉もしている。さらに、〈知識の積み重ね〉をいつでも大切にしている。このように、協働学習での努力を通じて、【研究プロセスの体験】ができる。最も大切なのは、自身の納得のできる【説得力のある結論に至るまで折れたくない】という意志を持つことである。こうした授業での葛藤を通じて、多くの試行錯誤を経て【「正解」までたどり着く】ことができる。

正しい方向が見つかるとともに、これまで【気づけなかった一面の浮上】が見られる。まず、完璧な文章より、〈私の書き方、私の個性〉があることに気づく。そのため、〈完璧さを目指さなくてよい〉ことが分かる。そして、〈「当然」のことも研究価値〉があり、さらに、これまで一人で研究活動を行おうと努力しているが、そうではなく、〈単独行動より他者と協力〉することの大切さに気付く。最後に、授業全体を通じて、アカデミック活動において、考え方が【より深く、より遠く】変容していくことが見えてくる。

(13) 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか。いつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。現象特性をどのように考えたか。

理論的メモに関して、データの分析を進めていくうちに、思いついたこと、感想や、すでに生成した概念との関係、概念名の修正歴などをすべて記入するようにしている。

今回の研究は、「日本語上級学習者への日本語教育」という具体的な文脈において、教室内の協働学習を通じて、調査、研究に基づき、最終的に一本のレポートを完成させるという問題発見解決の過程に焦点を当てる。異なる文脈、領域においても、同じようなプロセスを見だせる例について、例えば、異なる国籍の社員が共に仕事している日本の企業において、外国人社員が他者との協働作業を通じて、最終的に1つのプロジェクトを完成していくという過程も考えられる。

(14) 分析を振り返って、M-GTA に関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点などを簡潔にまとめてください。

- ✧ 分析テーマに重要だと考える概念を自分の判断でたくさん作っているが、最初の段階で少し多めに作っても大丈夫だろうか。
- ✧ カテゴリーにまとめる基準について少し悩んでいるところである。
- ✧ 概念間、カテゴリー間の関係についてどのように考えて、図で示すかをもう少しお教えいただきたい。

〈文献リスト〉

- 舘岡洋子 (2007) 「ピア・ラーニングとは」池田玲子・舘岡洋子『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房, 35-69
- 霍沁宇 (2015) 『『三つの対話』を用いた読解授業における日本語上級学習者の読み方の意識変容プロセス』『日本語教育』162, 97-112
- 門倉正美 (2006) 「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力ーアカデミック・ジャパニーズからの発信」
- 門倉正美・筒井洋一・三宅和子編『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房, 3-20
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践ー質的研究への誘いー』弘文堂
- 木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 佐藤公治 (1999) 『対話の中の学びと成長』金子書房
- 原田三千代 (2015) 「協働的フィードバックとしてのピア・レスポンス」大関浩美編『フィードバック研究への招待ー第二言語習得とフィードバック』くろしお出版, 139-179
- 堀井恵子 (2006) 「留学生初年次 (日本語) 教育をデザインする」門倉正美・筒井洋一・三宅和子編『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房, 67-78
- 山本富美子 (2004) 「アカデミック・ジャパニーズに求められる能力とはー論理的・分析的・批判的思考法と語彙知識をめぐってー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター移転記念シンポジウム報告書ーアカデミック・ジャパニーズを考えるー』, 98-104
- Amy Sander Ohta. (2001) Second Language Acquisition Processes in the Classroom: Learning Japanese. Lawrence Erlbaum associates, publishers, Mahwah, New Jersey.

〈会場からのコメント概要〉

(1) 回収資料にご記述いただいたコメント、疑問点、ノート:

(今後の研究の中でこれらのコメントを研究に反映していきたい)

①研究全体に関して:

- ✧ 授業はゼミに参加、レポートを書くというアカデミック活動、研究活動を行うことであり、研究を通して学習者の悩みが分かれば、上級学習者の教育に参考になる。
- ✧ 何を明らかにしたい研究か、何を明らかにする研究か
- ✧ オリジナリティ: 売りは何かを意識する
- ✧ 「上級学習者にとって必要となる日本語の教育を考える必要がある」→これをする上で、なぜ日本語上級学習者の思考方法の変容を見ることが重要なのか?
- ✧ 先行研究で何が分かっているのか? 例えばアカデミックイングリッシュの授業を通して英語上級学習者の思考方法の変容を探った研究はないのか?
- ✧ 他の質的研究法は検討したか?
- ✧ 誰に結果を一番読んでほしい? 応用者?
- ✧ 漢字文化圏出身者とそれ以外で、プロセスに違いは見られそうなのか?
- ✧ 日本語能力試験 N1 相当はどのようなレベルか?

②分析対象に関して:

- ✧ シラバス、授業の目的、目標はどうなっているか？
- ✧ アカデミック・ライティング？
- ✧ この授業は研究を完成していく授業である、一人ひとりテーマが違う
- ✧ 学習者: 文化的背景が違う
- ✧ アカデミック活動: 書くこと、読むこと

③分析テーマに関して

- ✧ 「思考方法」: 問題意識、批判的思考
- ✧ ピアの観点からの分析か、批判的思考の観点からの分析か
- ✧ 意識が変わっていくプロセス
- ✧ 思考にどこまでこだわるのか？これ以外のことに問題があるのではないか？
- ✧ 議論をどのようにすればよいかかわればよいのか？
- ✧ 日本の大学に留学した日本語上級学習者の外国人が協働学習(ゼミでのコミュニケーション?)を通して、日本における研究過程を習得していくプロセス？
- ✧ 研究過程を通してクリティカルな思考を身に着けるプロセス？
- ✧ 上記を通して何が変わったのか？変わったことを分析テーマとする
- ✧ 思考方法: 問題意識を持つオリジナリティ？批判的思考？
- ✧ データの特性を踏まえて、どのように分析テーマは修正されたのか？

④データの収集と分析に関して

- ✧ インタビューは学期の初め、中間、終了後？なぜ3回に分けた？
- ✧ 概念とどういう関係にあるのかを考える必要あり。時系列になってしまう。
- ✧ 【よりよいコミュニケーション】は重要だと考える。
- ✧ 二つが結果に出ている: ①クリティカルシンキングのプロセス、②日本的コミュニケーションの特徴を身に着けていくプロセス
- ✧ 以下の語りに関するノート: この体験を一つ概念となるのでは？ここで質的に変化しているように思ったりするのですが。

(O/151202)ただ、私も、最初は、あのう、日本の文化に、あのう、慣れていない時期は、あのう、ただ、「ああ、それは、ちょっと、違うんじゃない」っていう、すごく言っちゃってた、言ったりしてたんですけど、それだと、ちょっと、向こうの気を損なうというか、あのう、全然、そういう、喧嘩(笑)、口喧嘩する所じゃないのに、向こうが、ちょっと、気、気分が悪くなると、それも気分が悪くなっていく、あのう、機嫌を損なうのも、あれは、あんまり良くないなと思って、あのう、こう、和をあんまり、くずさな、くずさな、崩さない為にも、まあ…。だから、まず、向こうのことを、こう、認めるというか、「それも良いけど、こういう所が足りないんじゃない」みたいな。

- ✧ どのように和を崩さないように議論していくか
- ✧ 以下の語りに関するノート:説得力と関係づくり
(H/151210) 人に説明出来るように、出来るように、まあ、ある程度、読んだ内容を、自分の中でまとめておくっていうのは、凄く、大事なのかなとは思いました。
- ✧ 【円滑な交流のために】に関するノート:の配慮? 動的概念になっていません
- ✧ 【円滑な交流のために】に関するノート:概念名を【～の工夫】にしたらどうか?
- ✧ 【円滑な交流のために】に関するノート:抽象的で漠然。カテゴリーになる位の大きな括り。
「円滑」:円滑とはどういうことか? 円滑は目的であって、そこに至るプロセスを知りたい。
- ✧ 【円滑な交流のために】に関するノート:対立:批判、不快感、疑問を克服しないと、円滑～にはいかない。
- ✧ 【円滑な交流のために】の定義(他者との協働学習を通じて、日本語でより円滑なコミュニケーションを行うために、どのような工夫が必要かを考えること。→この部分を解釈して概念を作った方がよい?
- ✧ カテゴリー間の関係性の以前に概念同士の関係性を作ることが先のように考えます。そこからカテゴリーが見えてくるのでは? 大変ですよ。頑張ってください!!!
- ✧ 【円滑な交流のために】に関するノート:この具体例をいくつかに分ける?
- ✧ 【「正解」までたどり着く】⇒自分なりの～
- ✧ 〈円滑な交流のために〉←→〈敢えて「生意気」に参加
- ✧ 〈敢えて「生意気」に参加し〉たりしていた→〈敢えて「生意気」に参加する〉ようにしている。
- ✧ 〈「考えすぎ」でも考える〉→〈「考えすぎ」でもさらに考える〉

(2) 会場でいただいたご質問、コメント(会場での回答と現在の感想も含む)

①どうやって今回の研究は日本語教育に役に立ちうるのか?

筆者自身はこれまで日本語学校などの教育機関で日本語学習者として勉強してきた。これまで参加してきた上級日本語クラスでは、日本語能力試験 N1 や、日本留学試験の試験問題を解くことが多々あった。しかし、実際大学、大学院に入ったら、講義を聞いたり、文献を読んだり、ゼミで他者の論文を読んで質問、コメントしたり、自身が発表して他者と質疑応答したり、また、自ら調査をして、論文を書いたりする場面が多い。こういった一連のアカデミック活動によりよく参加できるように、上級学習者にとってどのような日本語教育が必要なのか、を考え始めた。本研究の対象となる日本語授業は、日本国内の大学で行われた上級学習者を対象とするアカデミック・ジャパニーズの授業である。授業は社会言語学に関する調査を学習者に各自してもらい、最終的に一人一本のレポートを完成していくことを内容とし、協働学習を重視して行う。授業に参加した学習者は専門分野、属性などにおいて多様性がある。本研究では 1 学期の授業活動を通じて、日本語上級学習者の意識がどのように変容していくかを調査していきたい。調査結果は今後、上級学習者向けのアカデミック・ジャパニーズの授業の参考にもなり、日本の大学、大学院でアカデミック活動に臨む上級学習者自身にも参考になると思われる。

る。また、発表後、研究会に参加した方々からコメントをいただいて、本研究の調査内容を見て、日本人も同じような悩みがある場合もある一方、外国人ならではの意識(例えば、〈安心感につながる留学生同士の交流〉〈できる「フリ」をしている〉など)にも気づいたため、本研究の調査結果は今後、外国人に接する日本人の方々にも参考になるのではないかと考える。

②思考方法の変容に注目すべきだと判断した理由は何ですか？

分析はまだ始まったばかりの段階ではあるが、最初のころ分析テーマを思考方法に設定した理由も次のように、自身の学習経験、特に読解を中心とする学習経験と関連がある。これまで中国で受けてきた教育の影響もあることが考えられるが、文章を読む際に受身的で、受動的に読む傾向があり、特に外国語の文章の場合、その内容がありがたく思い、知識として勉強しようとする意識が強い。しかし、特に大学院に入り、ゼミなどに参加し、研究活動を行う際に、文章を積極的に読み、その内容について批判的に考え、問題を発見していく必要性に気づくようになった。自身のこのような気づきに基づき、今回授業活動における学習者の思考方法に注目したいと最初考えたのである。

③日本人も、例えばアメリカの大学の修士課程に入り、②と同じような経験をするのではないか。

日本にきた外国人に特化する必要性があるのか。

ご指摘はごもっともだと考える。まったくアカデミック活動を行った経験のない人であれば、国籍に関係なく、最初はこのような経験をする可能性がある。今回の調査は、国籍など、背景の異なる外国人上級学習者が日本の大学のアカデミック・ジャパニーズ授業に集まり、彼らが協働学習を通じて、実際どのような問題に会い、どのような悩みが生じ、またそれをどのように克服し、アカデミック活動を行う際の考え方、意識がどのように変化していくのかを分析していきたいと現段階考えている。

④シラバス上、この授業の目的はどうなっているのか？

研究会の後、授業のシラバスをもう一度確認した。シラバスの授業内容は、授業が進むにつれて、その後変更もあったが、当初の授業の目的、ポイントなどは以下の通りである。

表 5 授業「社会科学の日本語上級」シラバス抜粋

学部・学生の指定

社会学部の留学生(とくに専門教育に入る準備段階にある1,2年生)を対象にした授業である。交流学生や日研究生、大学院研究生の受講も歓迎する。ただし、日本語能力は上級・後(JLPTのN1合格)以上の力が必要である。社会学部以外の留学生でも、社会科学全般に興味のある学生は履修することができる。日本人学生は履修することができない。

授業科目の目的

大学・大学院において日本語による社会科学のアカデミック・スキルを身につけることを目的とする。とくに、論文・レポートの書き方、ゼミでの発表やコメントの仕方を学びたい学生に適切な授業である。

授業科目の到達目標

社会科学の学問分野において日本語で自律的に学ぶことができる総合的な日本語能力を身につけることが目標である。

授業の方法

学生同士の協働学習(peer learning)や教員を含めた全体でのディスカッションを重視して授業を行う。課題も毎週出るので、その準備も必要である。

教育課程の中での位置づけ

社会学部の専門教育を日本語で受けられるための授業なので、1、2年生の受講を基本とする。ただし、既述のとおり、日本に短期留学中の交流学生や日研生、大学院研究生も歓迎する。

授業の内容

クラスメートと協力しながら論文・レポートを実際に作成する作業をとおり、研究テーマの選び方、参考文献の読み方・引用の仕方、データの分析の仕方、考察の深め方、要旨の書き方などを学ぶ。

計画(回数、日付、テーマ等)

1. ガイダンス(かならず出席してください)9月29日
2. 学術日本語の基礎(担当分野の決定)10月6日
3. 先行研究①を読む(ピア・リーディング)10月13日
4. 先行研究②を読む(ピア・リーディング)10月20日
5. 先行研究を表現する(ピア・レスポンス)10月27日
6. 研究テーマを決める(ディスカッション)11月10日
7. 研究テーマを表現する(ピア・レスポンス)11月17日
8. パイロット調査を実施する(教員と相談)11月24日
9. パイロット調査をまとめる(ディスカッション)12月1日
10. 本調査を実施する(教員と相談)12月8日
11. 分析を表現する(ピア・レスポンス)12月15日
12. 考察を表現する(ピア・レスポンス)12月22日
13. 論文にまとめる(ピア・レスポンス)1月12日
14. 要約を表現する(ピア・レスポンス)1月19日
15. 成果を発表する(プレゼンテーション)1月26日

授業のポイント

①専門の授業で、日本語で学ぶのに役に立つ授業である

・論文・レポートを書くのに必要なことができる授業です。具体的には以下の通りです。

先行研究の読み方・引用の仕方

研究テーマの決め方・示し方

予備調査の実施の仕方・まとめ方

本調査の実施・分析・考察の仕方

論文・要旨・発表のまとめ方

・ゼミに必要な発表・質問・コメントの方法を学びます。調査の対象がゼミの談話であり、それを詳細に分析するなかでゼミでの望ましい行動を学ぶことができる授業です。

②協働学習を生かした授業である

・協働学習(ピア・ラーニング)を生かした授業です。先生が一方向的に話すのではなく、グループや全体でのディスカッションを重視する対話が中心の授業です。

③忙しい授業である

・みなさんに確実に日本語による研究能力を伸ばしてほしいと願って設計している授業ですので、やりがいがありますが、かなり大変な授業だと思っています。教師自身、きちんと準備をして気合いを入れて臨むようにします。

シラバスにより、本研究の対象となる授業は、大学・大学院において日本語による社会科学の

アカデミック・スキルを身につけること、特に、論文・レポートの書き方、ゼミでの発表やコメントの仕方を学ぶことを目的とすることが分かる。研究目的により、この授業の捉え方が異なる場合が考えられる。例えば、1 学期の授業を通じて、一つのレポートを完成していくというアカデミック・ライティングの授業だと捉えることもでき、協働学習を通じて、ゼミでのコメント、質疑応答の方法を学ぶ授業だと捉えることも可能であり、また、調査、分析などを通じて、一つの研究を行うというような捉え方も考えられる。本研究では、本授業を、協働学習を通じて、一つの研究を完成していくという捉え方にしていきたい。

- ⑤本研究は、アカデミック・ジャパニーズ的な要素に注目するのか、異文化背景を持つ学習者同士のペア活動に注目して分析を進めていくのか、また、ライティング授業について分析を進めていくのか、はっきりしたほうがよい。

最初ははっきりしていなく、アカデミック・ジャパニーズ的な要素と、異文化を持つ学習者同士の協働学習、両方に注目したいと考えていた。研究会でご指摘を受け、もう一度考えを整理し、「異文化背景を持つ上級学習者同士の協働学習」に焦点を当てたい。それを通じて、日本語で調査したり、話し合ったり、レポートを書くという研究活動を行う、という具体的な文脈における学習者たちの意識変容を明らかにしていきたいと現在考えている。

- ⑥日本のゼミで、いろいろな日本語的な特徴が見られる。外国人留学生在が日本的なゼミにどのようなについていくかに注目するのも面白い。

ご指摘はごもっともである。自分自身も、日本のゼミに参加する際に、いろいろ悩みがあり、日本語で行われたゼミを分析することは外国人にとって非常に意義のあることだと考えている。また、対象となる授業で行われたゼミの分析は、日本人だけではなく、留学生も入っており、日本人と留学生との話し方の違いや、学生と教師との違いなども分析で見えてくる。そういった分析で見えてきたことを、学習者同士の協働学習を通じて、また新たな気づき、意識の変容にもつながり、彼らの普段のゼミ参加などにも影響を与えられると思われる。これからの分析でこの点に関しても見ていきたい。

- ⑦インタビューを3回に分けた理由は？1回目語った内容と3回目語った内容と異なる点があるのでは？

今回のインタビュー調査はプロジェクトとして行われたものであり、1 回目のインタビューが終わった後、内容を分析した上で、2 回目、3 回目のインタビュー調査を行ったわけではなく、あらかじめインタビューの質問項目を設定し、3回に分けて調査を行った。ご指摘の通り、1 回目の調査と3 回目の調査で語られた内容で違いが出てくる可能性がある。

【SV コメント】

山崎 浩司(信州大学)

SV を通して、霍さんの研究テーマは、日本語を母語としない大学生対象の日本語教育のあり方を検討するうえで役立つ知見を提示すること、であると私自身は理解しました。周知のとおり、M-GTA では研究テーマと分析テーマを区別し、前者から後者を絞り込みます。本研究では、霍さんが研究テーマとして提示した「協働学習における日本語上級学習者の思考方法の変容プロセス」が、分析テーマに該当しうると考えられます。

今回の研究会であらためて木下先生がコメントしておられたように、分析テーマは「～プロセス(の研究)」と一文で端的に示すべきで、この点、霍さんの研究テーマを分析テーマとみなすなら、形式的な問題はありません。ただ、内容的には検討の余地があると考えます。

当日の SV でも触れましたが、「思考方法の変容プロセス」に照準するという霍さんの選択的判断の根拠があまり明確ではありません。おそらく霍さんご自身の見立てがあるのだと思いますが、受講者の何に関する思考方法が、どのように変容していけば、受講者の日本語に関するどのような能力が上がる、と見込んでおられるのでしょうか。あるいは、そもそもこれとは異なる見立てをお持ちでしょうか。分析テーマは、特定の研究において、【研究する人間】である自分が何を一番明らかにしたいのか、明らかにするためには何にどのように照準すべきなのか(といった見立て)を、自分なりの明確な根拠をもとに表明したものである、と私は思います。

それから、当日お尋ねできませんでしたが、分析テーマと収集したデータを照らし合わせた結果、分析テーマを修正することになりましたでしょうか。先行研究のクリティックや自身の現場経験に基づいて最初に設定される分析テーマは、既述のとおり一つの見立てであり、データに表れる対象者自身の考えや行動のポイントや方向性を、大枠として捉えられている保証はありません。だからこそ、分析テーマとデータを比較分析し、両者にズレがあれば、データの特性に合わせて分析テーマを修正する必要があります。M-GTAを含む GTA では、分析は grounded on data(データに根ざす)でなければならない、という大原則があります。これは概念生成の時にだけ適用される原則ではなく、分析テーマの設定を含む研究のあらゆるフェーズにおいて守られるべき原則です(あくまでもデータ優位、ということ)。この点も意識して、あらためて分析テーマの検討をされてみてください。

フロアの参加者からデータ収集について、なぜ各対象者に 3 回インタビューをしたのかなど、いくつか質問がありました。確認ですが、別の研究目的のもとにデザインされた共同研究で収集したデータを、今回の霍さんの個人研究でも使っている、ということでしょうか。もしそうならば、この点を「データの収集法とデータ範囲の方法論的限定」において、明示する必要があります。なお、研究目的に即して自ら計画したデータの収集と分析を行うのが理想ですが、研究の現実的な制約から今回のようなケースもあり得るわけで、個人的にはこうしたケースでも M-GTA 研究は可能であると考えます(我田引水で非常に恐縮ですが、私の博論研究も同様のケースでした。詳しくは、<http://hdl.handle.net/2433/108274> の特に pp.31-32「第 2 項 限定要因の確認」を参照)。

最後に、やはり用語の整理(例えば、「協働学習」と「アカデミック・ジャパニーズ」はどのような関係にあるのか)と、今回の研究における先行研究にはないオリジナリティ(この研究ならではの、という部分)の意識化が、今後研究を進展させるうえで大事なポイントになってくると思われます。ご研究が最終的に実践現場で十分に活かされるような実り多きものになるよう、ご祈念申し上げます。

【第3 報告】

北村 雅昭(京都美術工芸大学)

Masaaki KITAMURA : Kyoto Arts and Crafts University

経営プロフェッショナルのキャリア形成における転職の研究～CFOの転職経験に焦点をあてて～
Research on the job change process of the professional managers ～Focusing on the CFO's job change experience in Japan～

研究目的:投稿論文、学会発表 (キャリアデザイン学会での発表を予定)

1. 研究動機

- ・バブル崩壊以降、多くの企業がリストラ、早期退職や成果主義の導入に踏み込む中で、日本の経営は崩壊したとの認識が広がり、キャリア形成を会社に頼るのではなく、(転職も含めて)自己責任で考えるが望ましいという「キャリア自律」が叫ばれるようになった。
- ・しかし、昨今、転職等の労働力移動はむしろ抑制傾向にあり、若年層も一時は転職型キャリアへの志向性を高めたが、最近急速に一企業内キャリア、終身雇用への志向性を高めている。企業も終身雇用など日本型雇用システムに回帰しつつあるとの研究報告がある。
- ・その一方で、厳しいグローバル競争への対応、M&Aなどを含めた大胆な成長戦略の実現、苦境に陥った事業の再生等のためには、いろいろな会社で実績と経験を積んだプロ経営者の力が必要との認識が広がりつつあり、実例も増えつつある。
- ・将来、ベースとして日本型雇用システムが維持されるとしても、人口減少やAIの普及等大きな環境変化が予想される中、成長を牽引できるプロ経営者へのニーズはますます高まるものと思われる。プロ経営者となるには、若い時から常に能力をストレッチさせ、数々の修羅場を経験し、経営者としての力を高める必要があり、多くの場合、転職を通じて複数の会社を経験するキャリアパスが必要となる。しかし、現状では、そうしたキャリアパスを目指す層は少数に留まっている。
- ・その理由としては、そうしたキャリアのロールモデルが少ないために、先の見通しが立ちにくいことや、転職系キャリアを歩む場合のリスク、ストレスが極めて高いことが阻害要因になっているからではと思われる。

・本研究においては、転職型キャリアを通じて、今後、ニーズが高まるであろう経営プロフェッショナルである最高財務責任者(以下、CFO)に到達することに成功した人物を対象に、なぜ、そのようなキャリアを選択したのか、過去の転職行動をどのように行ってきたのか、どのような個人特性を持ち、どのような構造要因が助けとなったのか。転職という転機をどう活かし、どう乗り切ってきたのか等についてインタビュー調査を行い、転職型CFOの転職行動という限定された領域において、行動の説明と予測に資する一定の仮説を構築したいと考えている。

2. M-GTAに適した研究かどうか

次の4点から、本研究はM-GTAに適した研究と考えた。

(1) 社会的相互作用

転職型CFOの転職行動については、

- (a) 職場における上司、同僚、部下との関係
- (b) 人材紹介会社のエージェントや以前の同僚等社外のネットワークとの関係
- (c) CEOとの関係(CFOになってから)

の3つの関係者との相互作用が重要な役割を果たしていることから、社会的相互作用を扱う分野と言える。

すなわち、職場での関係性を通じ、自らの適性や優位性を見出し、必要な能力を構築する一方で、組織への違和感や離職動機を育む。また、生涯を貫くキャリアストーリーの構築についても、転職会社での上司、同僚の行動が重要な役割を果たす。

実際に転職する際には、人材紹介のエージェントや以前の会社の同僚など、組織外の人脈形成が単なる情報源だけでなく、離職動機も含め重要な役割を果たす。

CFOになってからは、トップであるCEOとの緊張関係がキャリア発達においても離職動機の形成においても極めて重要となる。

(2) プロセス性

転職型キャリアにおいても、いきなり、転職が起こるのではなく、それぞれの転職ごとにそこに至るプロセスがある。また、複数の転職行動を眺めてみると、会社に入ってから自分の原点を確認し、仕事の自信を付けた後の最初の転職、転職会社でのいろいろな学びの中から自分のストーリーを構築した後の転職、そして、チャンスを待ってCFOという経営幹部職にジャンプする際の転職など、転職行動についても発達のプロセスがある。したがって、プロセス性のあるテーマと言える。

(3) 実践に寄与する理論の形成

経理系でCFOに至るキャリアのパターンと構造を明らかにすることは、同様のキャリアを目指す人にとって大きな関心事である。また、同様のキャリアを目指しながらも行き詰る人、こうしたキャリアの人材を社内で受け入れて活用しようとする企業、キャリアカウンセラーのいずれにとっても極めて実践的な知見を提供すると考えられる。

(4) 他の質的コーディング法ではなく、なぜ M-GTA なのか

個人の人生の振り返りを扱うキャリア研究においては、人間に対する深い理解が不可欠である。

そのため、切片化を行わずに、データ重視と文脈の深い理解を両立する M-GTA の手法が最も優れていると考えた。

3. 分析テーマへの絞込み

最初は「経営プロフェッショナル人材のキャリア」というタイトルで、プロ経営者を目指す人材のキャリア発達全体に焦点を当てた研究を考えた。しかしながら、仕事経験と転職経験の全てを視野に入れた研究は、調査対象が広くなりすぎて、有意義な示唆が得にくいと思われたこと、そもそもの研究のきっかけが、何故特定の人々は複数回の転職を成功させながら、経営幹部への昇進を果たすことができるのかという素朴な疑問であったことから、経営プロフェッショナル人材の転職行動に焦点を当てた研究することとした。

その後、何人かの経営プロフェッショナル人材に予備的なヒアリングをしたところ、経理、人事、IT、金融など、職能を何かに絞らないと理論を収束させることが難しいということが判明したため、研究の意義を考えて、職位としてはCFO、職能としてはCFOのバックグラウンドとしては一番多い経理系に絞ることとした。

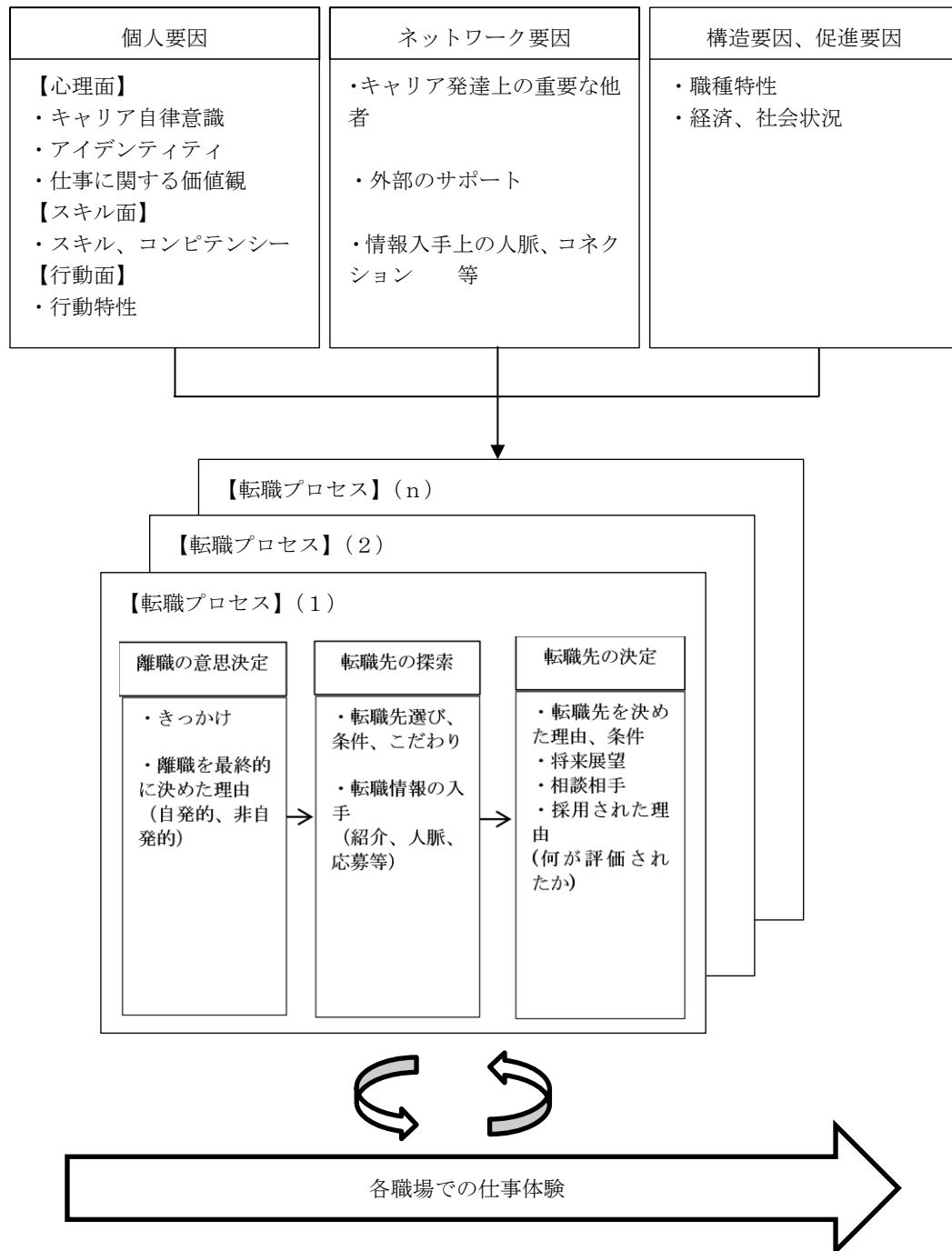
具体的には、CFOに注目した理由は次の通りである。

- ①客観的に見て明らかに成功例と言えるポジションであること、
- ②特定の事業分野の専門性よりも、ビジネス全般にまたがる幅広い知識と経験を短期間で身につける必要があるため、転職型のキャリア形成が適したポジションであること、
- ③戦後の日本経済の復興期において、事業系の経営者と、管理系の経営者が二人三脚で経営をけん引し、成功に導いた例を思い起こすと、トップの右腕として経営管理面を補佐する人材の強化は、現代においても日本経済の活性化につながると思われること、
- ④グローバル規模のビジネス競争が激化し、企業を取り巻く経営環境が一段と不透明となる中、資本市場から、資本収益性の向上やコーポレート・ガバナンス強化の観点から、CFOの役割強化に期待する声が多いこと、

なお、当初、CFOに到達した以降の全ての転職についても調査対象に含めるつもりであったが、解雇や解任などによる非自発的な転職や、一定のキャリアの中断を挟んだ転職については、それまでの自発的な転職と明らかに質が異なる上、インタビューサンプルに限界があることから、今回の研究対象に含めるかどうか検討中である。

4. インタビューガイドライン

- (1)ガイドライン作成上にあたっての枠組み(筆者作成)



(2)リサーチ・クエスチョン

RQ1. 複数回の転職を重ねて、CFOの地位を獲得した転職型CFOが、転職型のキャリアを選じたのはなぜか、どのような経緯でそうなったのか。

RQ2. 転職型CFOの転職行動(離職意思決定、求職活動、転職先の決定)にはどのような特徴があるか。

RQ3. 転職型CFOが、複数回の転職により、経営幹部職へのキャリアが実現できるのは、どのような個人要因、構造要因、ネットワーク要因等があるからか。

(3) インタビュー項目

○最初の就職から、職業生活全般に至るこれまでのキャリアについて、特に、これまでの転職経験（離職の意思を固めるところから、就職活動、次の就職が決まるまで）を中心に、記憶に残っているエピソードを交え、具体的に教えてください。

○これまでの転職経験を振り返って、

～一番大きな転機となった転職は、いつですか。

～最大のピンチであった転職は、いつですか。どう克服しましたか。

～転職先での初期適応に苦労されたことはありますか。どう克服しましたか。

○あなたのキャリアに関する以下の質問について、できれば具体的な仕事経験の例を通じて教えてください。

・転職を通じてCFOになるというキャリアが実現できたのは、考え方、スキル、行動パターンなどの面であなたがどのような人物だったからだと思いますか。（そのような個人特性を持つことにつながった仕事経験等があれば教えてください）

・経理系のキャリアで生きていくことを決めたのは、何故ですか。何がきっかけでしたか。その判断は正しかったと思いますか。

・CFOに必要な資質は何だと思いますか。あなたが、CFOの地位を得ることができたのは、何が一番大きな理由だと思いますか。

・あなた個人の能力、努力以外に、あなたのキャリアを助けてくれた要因はありますか。

・これまでの転職やキャリアを振り返り、あなたのキャリアをサポートしてくれた重要な他者とは誰ですか。（転職先を紹介してくれた人、相談に乗ってくれた人、支えになってくれた人等）

・今から振り返って、これまでのキャリアについてどのように感じておられますか。

～よかったこと、悪かったこと、得たもの、失ったものなど。

～自分と同じようなキャリアを目指す人に教訓として、何を伝えたいですか。

4. データの収集法と範囲

インタビューは、2回以上の転職を経て、CFO職を経験した40歳以上の方という条件のもと、筆者の直接の友人もしくは、その友人で研究の趣旨に賛同いただける方8名に行った。インタビューは、短いもので1時間半、長いもので2時間半、平均して1時間45分程度であった。

仮名	年齢	性別	経験社数 (うちCFO経験)	主な業種
IZ	55	男	6(2)	消費財、商社、サービス
KS	50	女	8(3)	消費財

IS	41	男	3(1)	商社
IN	40	男	4(1)	商社、サービス
YT	60	男	8(4)	消費財、医療機器
OG	54	男	4(1)	消費財、小売
SN	54	女	8(3)	物流、医薬品、エンターテインメント
US	46	男	5(3)	メーカー、消費財

5. 分析焦点者の設定

経理系からキャリアをはじめ、最高財務責任者(CFO)に到達した人

6. 分析ワークシート(別紙:要回収)

7. カテゴリー生成:概念の比較をどのように進めたかを具体例をあげて説明する

【転職型キャリアへのエントリー】と【転職のルーティン化によるキャリアアップ】というカテゴリー形成について説明する。

研究を始めるにあたって、転職行動は、

- (1) 離職動機→求職活動→オプションの比較検討→意思決定という一連の流れからなる。
- (2) 転職機会は自発的なキャリアデザインの機会になっている。
- (3) 人生の重大事であり、慎重な意思決定をしている

との仮説を持ってインタビューを進めた。

インタビューの転職経験から出てくる概念を比較検討する中で、初回、2回目の転職行動においては、(1)、(2)、(3)がほぼ当てはまるが、3回目以降の転職行動が葛藤や慎重さにおいて明らかにモードが切り替わり、モードが変化した後は転職回数も急増する傾向があることが分かった。

一方で、最初の転職に至るまでのプロセスにおいて、転職だけでなく、そこに至るまでのプロセスに共通の特徴があり、内面の動きと何らかの外的ショックが組み合わされることにより、転職型キャリアが始まることが分かった。

そこで1、2回目の転職行動について、【転職型キャリアへのエントリー】と名づけ、それ以降の転職行動を【転職のルーティン化によるキャリアアップ】と名づけた。

8. 理論的飽和をどう判断したか

インタビューは8名であったが、キャリアの初期から、CFOの地位を得、より上級のCFOを目指して上り詰めていく過程の転職については、最後のインタビューからは新たな概念が出なくなったため、理論的飽和と判断した。

しかし、不意打ちの解雇後の職探しや、CFOより下位のポストの受け入れ、長期の失業後の転職等については、事例が少なかったが、追加のサンプルを得ることも難しかったため、理論的飽和

には至らなかった。

9. 結果図: (別紙: 要回収)

10. ストーリーライン (別紙: 要回収)

11. 現象特性

生涯同じ会社で勤めることが前提の世界から、数年で転職することが前提の世界へと住む世界が変ることで、転職行動が大きく変化することが分かった。

従って、現象特性は、世界観の変化に伴う行動変容と考えた。

12. 疑問点

- ・サンプルが少ない中、少数の語りから出た概念を反対概念が存在しないことを確認した上ではあるが、結果図に含めてよいかどうかの判断。
- ・各概念間にある種の関数関係がある場合の記載方法をどうするか。例えば、Aを強く体験した場合は、Bに現れる作用が大きい、Aの体験が弱い場合は、Bに強い作用が現れないなど。

〈文献リスト〉

安藤秀昭(2015)『CFOを目指すキャリア戦略』中央経済社

宇田忠司(2007)「境界のないキャリア概念の展開と課題」『経済学研究(北海道大学)』第57巻第1号, pp63-84

宇田忠司(2013)「フリーランス・クリエイターのキャリア戦略とコンテンツ産業の構造」金井壽宏, 鈴木竜太編著『日本のキャリア研究 専門技能とキャリアデザイン』白桃書房, pp167-191

上野山達哉, 山下勝(2013)「ホテルワーカーの職業的コミュニティとキャリア形成」金井壽宏, 鈴木竜太編著『日本のキャリア研究 専門技能とキャリアデザイン』白桃書房, pp143-16* (←最終ページ要確認)

加藤一郎(2004)『語りとしてのキャリアーメタファーを通じたキャリアの構成』白桃書房

金井壽宏(2001)「キャリア・トランジション論の展開: 節目のキャリアデザインの理論的・実践的基礎」『国民経済雑誌』第184巻第6号, pp43-66

金井壽宏(2002)『働くひとのためのキャリア・デザイン』PHP新書

木下康仁(1999)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生』弘文堂

木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂

木下康仁編著(2005)『分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂

小杉俊哉(2015)『職業としてのプロ経営者』インプレス

高橋潔, 重野弘三郎(2010)「Jリーグにおけるキャリアの転機—キャリアサポートの理論と実際」『日本労働研究雑誌』No.603, pp16-26

服部泰宏(2016)「ルソー『組織における心理的契約』」『日本労働研究雑誌』No.669, pp56-59

室山晴美(2010)「キャリア・トランジション—キャリアの転機と折り合いの付け方」『日本労働研究雑誌』No.603, pp2-3

渡辺三枝子編著(2007)『新版キャリアの心理学—キャリア支援への発達のアプローチ』ナカニシヤ出版

- Bridges W. (1980) Transition: Making sense of life's changes. Cambridge, M.A.:Perseus Books (倉光修・小林哲郎訳『トランジションー人生の転機』創元社, 1994 年)
- Nicholson, N. and West, M.(1988) Managerial job change: men and women in transition. Cambridge University Press
- Schlossberg, N.K (2000) Overwhelmed: Coping with life's ups and downs. Lanham, MD: Lexington Books (武田圭太・立野了嗣監訳『「選職社会」転機を活かせ』日本マンパワー出版, 2000 年)
- Rousseau, D. M. (1989) "Psychological and Implied Contracts in Organization," : *Employee Responsibilities and Rights Journal*, vol.2, pp121-139
- Schein, E.H. (1978) Career Dynamics: matching individual and organizational needs. Addison-Wesley Publishing Company, Inc. (二村敏子+三善勝代訳『キャリア・ダイナミクスーキャリアとは、生涯を通しての人間の生き方・表現である。』白桃書房, 1990 年)
- Schein, E.H. (1990) Career Anchors: Discovering Your Real Values (Revised Edition), Jossey-Bass/Pfeiffer (金井壽宏訳『キャリア・アンカーー自分のほんとうの価値を発見しよう』白桃書房, 2003 年)
- Schein, E.H. (1995) Career Survival: Strategic Job and Role Planning, Pfeiffer & Company (金井壽宏訳『キャリア・サバイバルー職務の役割の戦略的プランニング』白桃書房, 2003 年)

<当日のご意見、コメントの概要>

【研究テーマ、分析テーマについて】

- ・どのような社会的相互作用に関心を持ったのか。
- ・M-GTAを用いた研究にするには、人の行為を理解する、人と人との感情のやりとりに焦点をあてるという志向性が必要。
- ・その人がどのような状況で転職を踏みとどまり、どのような状況で転職に踏み切ったが比較できればM-GTAらしい。
- ・人と人(組織、上司)との距離感が近づいたり、離れたりする瞬間に注目すれば、研究が深まるのではないか。
- ・CFOの自己像の形成プロセスというテーマであれば、M-GTAの良さを生かせる。
- ・「転職会社という学校」で、社会的相互作用を通じ、何をどう学んだかのプロセスが分かれば面白い。

【分析焦点者、分析テーマについて】

- ・肝心の分析テーマ、すなわち、転職のどういうプロセスを明らかにしようとしているのかがよく見えない。分析テーマをワンセンテンスで表現できるよう絞り込まないと、明確な結果が得にくい。分析を制御しないと雑多な内容が盛りこまれて、発散してしまう可能性がある。
- ・なぜ、分析焦点者として、CFOを選んだか、もう少し分かりやすい説明が欲しい。

【概念生成、カテゴリー生成について】

- ・インタビューガイドラインの作成のために分析の枠組みを作っているが、こうしたものがあることで、分類論に陥っているのではないか。

- ・例えば、誰にも相談しないというバリエーションがあったときに、対極例の探索は行ったのか。
- ・自分で作ったストーリーにインタビューデータを当てはめて解釈しているのではと感じられる箇所があった。分析焦点者と分析テーマに徹底的にこだわった上で、データを分析する必要。

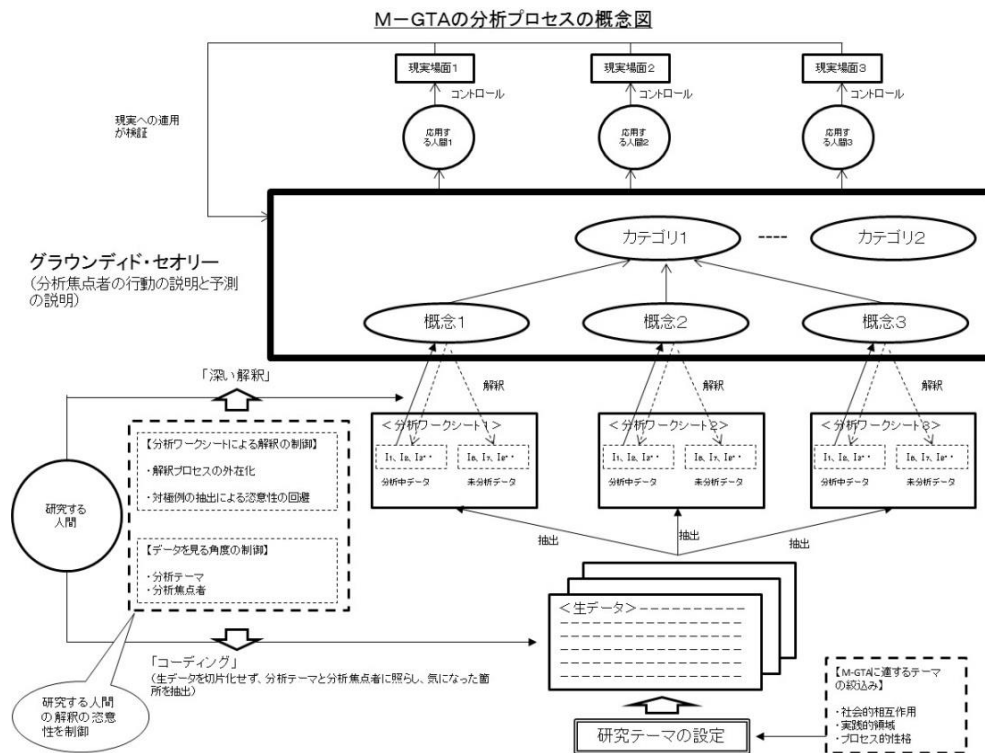
<感想>

経営学において M-GTA の活用事例が多くない中、多くの参加者にとって畑違いの分野と思われるにも関わらず、貴重な発表の機会を頂きましたことを心から感謝しております。

理論生成への志向性や人間への深い理解という点が、M-GTA を用いた直接的な動機ですが、スーパーバイザーである竹下先生のコメントや、フロアの皆様方からのコメント、質問を受ける中で、M-GTA という方法論が研究する人間の解釈を前向きなものとして認めつつも、一方で、恣意的な解釈と評されないための様々な制御の仕組みをビルトインした優れた方法論であることについて、学びを深めることができました。

自宅に戻って、改めて、木下先生の「グラウンディッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い」(2003)を読み直し、勉強のために下図のような形にまとめてみました。今後の研究を進めるにあたっては、破線で囲んだ部分に特に留意してまいりたいと考えております。

物分りの悪い学生であるにも関わらず、発表前から、丁寧かつ熱心なご指導をいただいた竹下先生、および、今回の研究会で多くのご指導を賜りました木下先生やフロアの皆様方に深く感謝したいと思います。本当にありがとうございました。



出典：木下(2003)をもとに筆者作成

【SV コメント】**竹下 浩(職業能力開発総合大学校)**

経営学(キャリア・デザイン学会でご発表予定)という、当研究会では小数派の(最近は増えつつありますが)領域から積極的に定例会報告にチャレンジ頂き、有難うございました。私も勉強させて頂きました。

頑張ってM-GTAを独学して、投稿を目前にして研究会で発表されたことで、分析に関する様々な悩みや疑問を直接フロアと共有、貴重なご指摘の数々を頂くことができ、ご本人にとっても収穫がおありのことと拝察申し上げます。

今回は京都と東京という遠隔SVでしたので、事前に8回ほどメールで、1度はお電話でやり取りさせて頂きました。対面でないとお伝えするのが難しい点は当日にお話することになりました。当日のやり取り(社会的相互作用とプロセス性、分析テーマと分析焦点者)は、ご本人の原稿で詳述されていると思います。時間の都合でお話できなかった点(分析には2つの向きがあること)について、以下共有いたします。

配布資料「インタビューガイド作成の枠組み」を拝見すると、知りたかったことは「転職の経緯」と「成功要因」(個人要因と環境要因)のようで、結果図もこれに対応しています。「M-GTA を分析ツールとして流用、調査テーマに関する参加者の経験と理解を体系的に示した」のなら問題ありませんが、せっかく定例会で報告したのだから本来の分析方法(社会学と社会心理学の思考)も経験しておこう、ということだと話が異なります。

興味に関連する語りを追うと無意識にそればかり目に付くので、「ちゃんと読んだけど、違う(他の)例は出てこなかった」で終わりがちです。朝テレビで見た星占いが夜に当たったと思うのも、これと同じ効果です。

「逐語記録の一部に注目する」は分析者の知見や問題意識に基づく行為ですが、次の手順があり、それが他者のデータによる実証／反証です。対極例、類似例、原因となる概念、結果となる概念等も考察・探索します。手間のかかる作業ですが、「理論への感度」スキルを養うために欠かせません。

カテゴリー間でも同様に、例えば結果図でいえば、理論への感度が働くと「他社でもやれる自信が無い人はいないか?」「会社で学ばない例は無いか?」「逆に『教える』、という例は無いだろうか」、とそれまで無かった発想が出てきます。概念を色々な方向に「開く」感覚です。こうして結果図は、当初自分が予想もしなかった形になっていきます。

このように「知見に基づいてデータを見る」方向と、「データから既存の知見に無かった着想を得る」方向が、互いに絶えずせめぎあうのです。最初の概念への着目と理論的飽和化の判断以外は、後者が長期にわたり優勢です。「M-GTA は実践だから主観で良く、分析者が責任を取れば済む」だけでは、一方向の分析に終始しがちです。

以上、少しでもお役に立てば幸いです。それでは、ご研究のますますのご発展をお祈り申し上げます。

◇各地の M-GTA 研究会活動報告

【中部 M-GTA 研究会の発足および活動の報告】

山崎 浩司(信州大学)

2017 年 4 月 1 日、中部 M-GTA 研究会が正式に発足しました。東京の M-GTA 研究会以外では、西日本、北海道、九州、沖縄に続いて、5 つ目の M-GTA 研究会となります。世話人は、阿部正子先生、伊藤祐紀子先生(ともに長野県看護大学)、倉田貞美先生(浜松医科大学)、長山豊先生(金沢医科大学)、そして山崎浩司(信州大学)の 5 名です。今年度から 2 年間は、山崎が会長、倉田先生が副会長、長山先生が事務局長を務めます。

中部 M-GTA 研究会は、中部地方で M-GTA を活用した質的研究の実践を支援すること、質的研究全般の方法論的な学習、研究、議論を促進すること、そして会員相互の親睦および他地方の M-GTA 研究会との親睦を深めることを目指します。年間の主要行事は、①研究会・総会(春)、②データ分析ワークショップ(夏)、③質的研究に関する講演会(冬)の 3 つです。甲信越、北陸、東海の 3 つの地方ブロックを巡回して開催されます。

会員は、中部地方(山梨・長野・新潟・富山・石川・福井・静岡・愛知・岐阜・三重の 10 県)に居住地か職場か在籍機関がある方に原則限定されます。ただし、初回のみ時限会員として入会せずに参加できます。また、他地方の M-GTA 研究会との親睦を深めるという目的に則り、一定の条件付きで他地方の M-GTA 研究会会員の方も本会にご参加いただけます。

記念すべき第 1 回中部 M-GTA 研究会・総会は、4 月 1 日に信州大学で開催されました。長野、新潟、石川、福井、富山、静岡の各県から計 25 名の方が参加されました。研究会では、岩本綾さん(信州大学)が「高校生が交換留学への参加を決めていくプロセスに関する研究」、川口めぐみさん(金沢大学)が「統合失調症者の家族が家族成員の発症に伴う困難への対処力を獲得するプロセス」について、それぞれ興味深い発表をしてくださいました。東京の M-GTA 研究会のように、発表者ごとに特定のスーパーバイザーをつけるという形ではなく、発表者に対して参加者が自由に質問やコメントをする形をとりました。参加者は、発表内容や発表者の熱意に刺激され、また、25 名というお互い顔が見える規模であったこともあり、発表者や他の参加者ととても活発な質疑応答や議論を展開しました。研究会に続いて開かれた総会では、規約案が承認され、役員が選出されました。

第 2 回中部 M-GTA 研究会は、金沢医科大学で 9 月 2 日(土)に開催予定で、分析ワークショップを行います。第 3 回研究会は、浜松医科大学で 12 月(日にち未定)に講演会を開催する予定です。これらに加えて、10 月に山形県立保健医療大学で開催する公開研究会を、東京の M-GTA 研究会と共催することになっています。そして、来年(2018 年)夏には、信州大学を会場に、第 5 回合同研究会をホストすることが決まっています。

中部 M-GTA 研究会の各事業に参加をご希望の方は、事務局までメールでお問い合わせください(chubumgta@gmail.com)。入会希望の方は、事務局にメール連絡の上、後日、指定の銀行口座

に年会費 3 千円をお振込みいただきます。今後、研究会のホームページを立ち上げ、広報活動を充実させてゆく予定です。中部地方と M-GTA に縁があり、さまざまな関心・専門・背景をもった方々の会への入会・参加をお待ちしております。これから一緒に中部 M-GTA 研究会を盛り上げてまいりましょう！

【北海道 M-GTA 研究会 活動報告】

横山 登志子(札幌学院大学)

北海道 M-GTA 研究会は、2007 年 12 月に例会を始めてから現在に至るまで継続して研究会を開催しています。研究会立ち上げのきっかけは、2007 年 9 月に本体の実践的 M-GTA 研究会が開催した公開研究会(札幌)です。公開研究会では、会員・非会員を含め 90 名近い参加を得て、木下先生にも講演をお願いしました。その際の実行委員であったメンバー(伊藤裕紀子先生・横山登志子)が定例研究会の立ち上げを決意し、わりとゆるやかなつながりの中で研究に取り組む看護・福祉・心理・教育の院生の研究支援を行ってきました。これまでに複数の大学の修士論文、博士論文の作成過程を応援してきました。

ただ、約 10 年の経過のなかでは研究報告の発表者が途絶えそうになったり(!)、世話人の伊藤先生が大学を移られて北海道から離れられたり(!)といういくつかの存続の危機を経験してきました。そのようななかでも、その都度、院生を送りこんでくださるありがたい大学教員の参加者や、指導教授を同伴して参加してくださる院生参加者、関東や道内の遠方から例会に参加してくださる貴重な方々のおかげで継続してきました。

現在は、隔月開催で土曜午後に2～3の報告を得ている状況です。参加者は、看護関係者が多いですが、心理系、福祉系、教育系、司法系とさまざまで、平均 12 名程度となっています。研究は、長いスパンで人の成長やキャリア形成のプロセスをとりあげた研究もあれば、数分～数十分の短いスパンで具体的な行為と認識のプロセスをみていこうとする研究もあって、それぞれにおもしろい着眼点があります。ひとつの研究報告をめぐる、いろいろな視点からのコメントがあるので、学際的な意見交換の場となっているところが魅力です。また、研究会を通して「研究や調査のおもしろさを感じた」と言って次のステップにチャレンジされる社会人院生も出てきて、世話人をしている側として続けてよかったと思っています。

北海道 M-GTA の例会はいつでもオープンですので、参加希望の方は是非ご連絡ください。

.....

◇第 10 回修士論文発表会のお知らせ

日時:7月 29 日(土)13:00~18:00

会場:大正大学 7 号館 741 号教室

.....

◇編集後記

今号には、中部 M-GTA 研究会と北海道 M-GTA 研究会からの活動報告が初めて掲載されました。それぞれの研究会は工夫をこらした、独自の活動をしています。これまでは、合同研究会や公開研究会を通じて、他の研究会の皆さんと親交を深める機会がありました。今後は、このニューズレターを通じて、他の M-GTA 研究会とのつながりを深めていきたいと考えています。(丹野ひろみ)